

顔の中にはつきりと現はれて来るやうなのを感じてゐたお蔭は、その瞬間に、夥しく似てゐる眼と鼻とを認めめた。

「さうに違ひない。」

かう思つてお蔭は猶じつとその小さい寝顔に見入つた。

それからそれへと種々なことが思ひ出されて来た。それにしても、男は何處にゐるのであらうか。何處に住んでゐるのであらうか。それはさけばわかる。あの友達と言ふのが、よく来る人だから、あの人から段々聞き正して見ればわかる。あの姐さんに訊いて見てもわかる。しかし、家はそれほど有福であるとは何うしても思はれない。月給なんかでも、澤山に取つてゐる人ではないに相違ない。でも構はない。東京に歸れる身になつたら、何うしても一度逢つて其話をしなければならぬ。この兒を一生親無し子にして置くことなどは出来ない。と、つゞいて、電話をかけた會社の男のことが思ひ出された。矢張、それと聞いたら、向うから遁けかくれて了ふかも知れなかつた。無心を言はれると思つて、此方の言ふことなどは本當にしないかも知らなかつた。

そして、さういふ向うの處置だつて、單に薄情だとは言ひ切つて了ふことの出来ないやうな處があつた。急に、お蔭は藝者稼業といふことを考へた。誰がわるいんでもない。皆な私がわるいんだ。かう思つたが、別に悲しいと言ふ氣も起らなければ、さういふ稼業はやめて了ふ氣にもなれなかつた。お蔭は唯すや／＼と寝てゐる赤兒の顔に見入つた。

あたりは依然として靜かであつた。枕元には、義兄の許からとゞけてよこした赤い白い鮎だのカルルス煎餅だのが置いてあつた。お蔭は起上つて、蒲團の上に乗つて、罐から煎餅の方を出して、一二枚白い前歯に當て、食つたが、さつき婆やが持つて来て呉れた冷えた茶を一杯茶碗について飲んで、今度は傍にある鏡を取つて、自分の顔を映して見た。

やつれた蒼白い顔と、取次のない寢衣姿と、眼の縁のわるく黒くなつたのとお蔭は見た。無造作に束ねた髪、肉のこけた瘦た頬——しかし身二つになつた今のお蔭には、以前のやうな暗い辛い苦勞や煩悶はいくらか軽くなつてゐた。お蔭は櫛で後れ毛を梳き上げた。

やがて赤兒が眼を覺まして泣き出したので、お蔭は立つて抱いて来て、それを半ひろけた白い

肌へと押當て、乳をふくませた。かうしてゐる中にも、男の顔は次第に歴々とその子の顔の中に現はれて来るのであつた。

## 四

母親はそれでも度々遣つて来て呉れた。種々な苦勞で娘の姿の著しく衰へて行つたことが母親にもよくわかつてゐるけれども、さりとて今度のことでは娘の身の上に重なつて行つた負擔の一伍十什を話さないわけには行かなかつた。義兄は抱主から迫られて、殆ど執達吏を向けられるばかりになつて、方々無理算段をして漸く金を借り集めた。姉はあるかないかの着物までも質に置いた。兄はある入から質のわるい金を工面した。あまり心配させてはと思つて、詳しく話さなかつたけれど、かう前置して、母親は抱主の無慈悲であつたことを詳しく話した。

「少し肥立つたら、一日も早く稼ぐやうにして貰はなくつては！」

母親はかう言つて、今度出るところをあれかこれかとお薦に相談した。母親の眼中には生れた

兒のことなどは少しもなく、百日も経つたら、何處か好い貰手をさがしてそのまゝ、親知らずでやつて了はうと思つてゐた。その方にだつて、お前、一文もつけずに貰つて呉れるものなぞありやしないからね。そのお金だつて拵へなけりやならないんだからね。などと母親はお薦に言つた。半金持つて行つた時、抱主の方から平生着とちよつとした着更だけは持つて来たが、新たに稼業をしやうとするにも、あとをすつかり綺麗にして、お座敷着を持つて来なければ何うすることも出来なかつた。さうかと言つて、執達吏まで向けて来るやうな抱主に此方から折れて行つたつてしやうがないからね。それは先では、肥立つたら、また来て貰へば好い位に思つてゐるんだけどもね。それぢや餘り蟲が好すぎるし、此方だつて詰らないからね。」

漸く二七夜を済ました頃から、辛い行先の生活のことは、またお薦の胸に暗い影を投て行つた。身二つになつた喜悅も、ほんに僅の間であつた。お薦は乳を含ませながら、「お前さんなんか、生れて来なけりや好かつたのに……何故生れて来たんだえ？」ひとりかう言つて涙を流した。

種々に想像したことなどは、とても遂げ難い希望であつた。お薦は生兒の父親のことに就いて

は、母親にも誰にも口に出しては言はなかつたけれど、折角確かりと攫んだ物をそのまゝ、手離して了つて、再びもとの生活に入つて行くことの頼りなさを染々辛く感ぜずにはゐられなかつた。親と言はれ子と言はれて、楽しく暮して行く人達のことを思ふと、お蔭は體中が震へるやうな悲哀を覺えた。

しかし靜かな田舎は何事もなくて一日一日と經つて行つた。養蠶は今忙がしい最中で、家の人達は夜も眠らずに桑の葉を切つたり蠶兒の生長を見たりした。母家の蠶室には、深更まで明るくランプの光が輝いて見えた。

時には水霜の下りるやうな寒い朝などもあつた。さういふ時には、人達は寒暖計を室内に置いて、火を盛んに起して、室内の温度の平均を取るやうにした。其處でも、此處でも、養蠶の話で持ち切つてゐた。さつきの赤い花が庭石の間に燃えるやうに咲いてゐた。

お蔭は丸で離れ島にでもゐるやうにして、忙しい世間とは全く離れて、寝たり起きたりして暮した。其頃では婆やの手を煩はさずに、お蔭は赤兒のおしめを井戸端に持つて行つて洗つた。赤

兒の啼聲も段々物々しくなつて、乳を吸ふ力も強くなつたが、物思をした故か、その頃からお蔭の乳は分量が段々少くなつて來てゐた。乳が出ねえと見えるね。ミルク罐でも買つて來てやらねえぢや、これぢや赤坊が可哀相だぜ。婆やは、お蔭の乳を自分で絞つて見て、「これぢやとても足りつこはねえ。何うして、こんなに出なくなつたかな。元はあんなにむせつ返るほど出たつてがな……。何か心配ごとでもしたけえ。産婦にや心配ごとは大毒だ。すぐ乳へ來るからなし。婆やは若い母親の慣れないのを氣の毒がつて、忙しい間を、すんで、一里ほどある町へミルクの罐とミルクの罐とを買ひに行つてやつた。そして、歸つて來てから、ミルクの溶き方などを丁寧に教へた。

五

一夜、母屋では、總領の嫁の二十五になる女と婆やと近所から手傳ひに來てゐる中年の男とが丁度不寝番で、ランプをとこゝろくにつけて、頻りに蠶室の桑の加減を見てゐた。婆や其方の方

は好いかえ？ もうやらなくてはならない頃だらう。」かう嫁は婆やに言った。

明日の朝までの桑は、暗くならない中に摘んで来て、廣い臺所に一杯に積まれてあつた。座敷中に隙間なく並べた籠の中の蠶兒は、もう大きくなつて、その桑を食ふ音は静かな夜の空氣の中に音を立て、聞えてゐた。

不寝番だと言つても、連日連夜の勞働に勞れてゐるので、一時から先は、皆なして代り合つて眠ることにした。「三時になつたら、起して呉れや。」中年の男は、かう言つてすぐ傍の蚊帳の中に入つて行つた。「婆や、ゐるがい、や。」「まア、若お上さん、おやすみや。俺ら傭くねえから。」かう互に譲つてゐるが、昨夜も遅くまで起きてゐたので、「ぢや、ちよつくら寝るかな。」かう言つて、婆やは自分の寢床に行つた。

とろとろしたと思ふと、女の泣聲が耳に入つて、婆やは驚いて飛び起きた。すぐ、蚊帳を出て行つて、

「何うしたや。」

「大變だよ、婆や。赤坊が死んだと。」

かう嫁が言ふので、氣がついて見ると、其處に蒼白い興奮した顔をしたお蔭が跣足で泣きながら立つてゐた。

「何うしてな？」

「今、目が覺めて見ると、冷めたくなつて……冷たく……。」

泣聲に支へられて、お蔭の言葉は十分に聞き取れなかつた。

「お前さん、抱寝したんかや？」

「……………」

「困つたこと出来たな。」かう言つたが、婆やと嫁とは急いでお蔭について、隠居所の所へと行つた。

「私が……私が……私が……。」お蔭は泣き止まない。

隠居所の雨戸は一枚明けてあつて、其處から薄暗くランプのついてゐるのが見えた。婆やを一

番先について嫁が入つて行つたが、歎歎けてゐるお蔭は、そのまゝ、雨戸に顔を伏せて、中に入らうとはしなかつた。

婆やと嫁とは、中で、何か頼りに言つてゐたが、つゞいて、「これは、もう駄目だ。冷めたくないつてるア。」かういふ婆やの聲がきこえた。雨戸に顔を伏せたお蔭は、又一しきり聲を立て、泣き出した。

「乳伏せたんべ。」

「さうかねえ、まア、可哀相に……。」

「若い者はな。だから困るだ……。」かう言つたが、婆やはお蔭の泣いてゐる傍に行つて、

「背から抱寝したかね。」

「……。」

堪らないと言ふやうに、身も體も置きどころがないといふやうに、お蔭は唯泣いて歎歎けた。お蔭は背の中は離して寝かして置いたが、夜に一度起きて乳を舐ませて、此可愛い子にもや

がて離れなければならぬなどと思ひながら、しつかり胸に押當て、抱いて寝た。

「兎に角、お醫者を呼んで來なくつちやなんねえ。」かう言ひながら婆やは母屋の方へ驅けて行つた。

しかし醫師は容易にやつて來なかつた。中年の男は二度も三度も町まで迎ひに行つた。漸くやつて來た時には、もう夜がほのかに明けかけて、緑葉の梢に白い霧がしつとりと重くかゝつてゐた。

其間お蔭は唯打伏して泣いてゐた。お蔭の眼は赤く腫れ上つて、寝衣の袖は涙にぬれそぼちてゐた。亂れた髪や扮装をお蔭は直さうともしなかつた。一時に興奮した悲哀は今去つて、喪心したやうな状態がそのあとを領した。

醫師は二言三語聞いてから、

「フム、何うも仕方ありませんな。もう三時間、もつと以上も経つてゐるでせうから、手當てをして見ても駄目です。何うも過失ですから仕方ありません。」

かう言ひながら、お薦が取亂したさまで其處に坐つてゐるのをじろくと見て、  
「この方ですな。」

「え、若いもんだから……。」

かう傍から婆やが言つた。

「どうも、仕方がありません。若い中には、よくかう言ふ過失があるものですから、——此間も町で二つほどありました……。」  
「巻煙草に火をつけて、本當だと、やかましいんですけど……。」  
「なアに、別に何んといふことはないんだから、あとで、戸籍を書いて持たせておよこしなさい。診断書は書いて上げますから。」

「難右う御座りやす。」

婆やはやつと安心したやうに頭を下けた。

醫師が歸つて行つてから、母屋の主人だの上さんの總領の息子だのがやつて来て、型のやうな悔みの言葉を繰返してお薦に言つた。お薦は、をりをり胸が迫つて来るやうにして袖を顔に押

當てた。

陰では、人達は「でもまア、何うせ不運に生れた子なんだから、いつそかうなつた方が好かつたかも知れない。」などと言つた。「矢張、藝者なんかしてた女は、しまりがいいから、こんなことを仕出かすだ。」  
「自業自得だと言ふやうな言ひ方を中年、男はした。」

電報で吃驚して飛んで来た母親の姿を見た時には、お薦の涙は更に新しく白い頬を傳つて流れた。「母さんや兄さんや姉さんに種々心配をかけた場句に、こんなになつたと思ふと……母さん、申譯がない。」  
「かうお薦は泣崩折れた。」

「まア、まア、ね、あんな丈夫だつた兒が、こんなになつちやつたかねえ。……まア、可哀相に……。」  
「母親は死んだ兒の顔にかけた布をまくつて見て、「何んなに苦勞したつて、よしんば人にやつたつて、生きてゐさへすれば、お前の子だつたのにねえ。残念なことをしたねえ。」  
「かう言つた母親の眼からも涙が流れた。」  
「母さん、もう……もう……。」

お薦はあとの言葉を言ふことが出来なかつた。

母親は母屋に行つて、いろ／＼世話になつた禮を言つたり、夜中に人騒せをした詫びを述べたりした。しかし母屋では、養蠶に忙殺されて、さうした小さい悲劇などは、すぐ念頭から去つて了つてゐるやうに見えた。嫁も婆やも總領の息子も、朝の桑を摘みに島の方へ揃つて出懸けるところであつた。主人は母親に型のやうな悔みの言葉を述べ終るとすぐ、「お寺の桑を買うやうに言つて来いや、高くつたつて仕方がねえ。食はせずには置けねえから。な、早く行つて来う。其處にゐた中年の男にかう吩咐けて立上つた。

次ぎの汽車で義兄もやつて来た。で、いろ／＼相談の結果、東京に持つて行つても仕方がないから、手軽く田舎の寺で葬式をすますことにした。それでも母親は、可哀相だと言つて、一晩とめて通夜をしてやることにして、おゆづりを縫つたり、白い團子を買つて来て上げたりした。線香の烟の下で、寺からよこした若い僧は、一時間ほど讀經をして行つた。

お蔭はセルの着物を着て、腹合はせの帯をしめて、髪をぐるぐる巻にしてゐるたが、それでも一度稼業をしたあかぬけのした姿は、何となく艶にあたりに見えた。お蔭は段々落附いて来てゐた。

小さな遺骸を棺の中に入れる時には、あれも入れてやらう、これも入れてやらうと言つて、小さな枕や、赤い襦袢や、ミルクの壺などを取出した。薄い縁だと言ふことが染々と胸にくり返へされた。いろ／＼に想像した希望、東京に歸つたら、是非一度逢つて其話をしやうと思つた男、その男にももう一生逢ふやうなこともないであらう。死んだ兒に縁の薄かつたのと同じやうに、矢張その男にも縁が薄かつた。かう思ふと長い間苦勞した心配や、苦痛や、さういふものはすつかり水の泡か何かのやうに溶けて消えてなくなつて了つてゐるのをお蔭は見た。今度生れて来る時には、こんなところではなく好いところに生れてお出でよ。遺骸を棺を涙に入れながら、かう母親の言つた時には、お蔭はまた涙を流した。

通夜の一夜は靜かに過ぎた。赤兒に添乳をしながら毎晩聞いた蛙の聲は、矢張同じやうに縁の野から聞えて来た。茫と白く展けられた夜の野には、麥の穂が一面に見渡されて、螢が一つ二つ魂か何かのやうにふわ／＼と明滅して飛んで行つた。

お蔭はをりをり立つて棺の前の線香を新しくした。

義兄と母親との間には、お薦の將來の話なども出てゐた。でも、ね、今、嫁に行かれても困るよ。それはね、いくらも貰ひ手はあるだらうけれども……。もう少し一生懸命になつて稼いで貰はなかつちや……。借金だつて、ちつとやそつとぢやないんだからね。此間、上總屋が来て、よし町の方か何かにはいい家があるつて言つてゐたけれど。などと母親は話した。

翌朝は早く棺を寺の方へ持つて行つた。母親、義兄、お薦、それに母屋から婆やと主婦とがついて行つた。杉の深く茂つたしんとした寺、花うつ木の赤く咲いた垣、小さな穴は野に添つたひろびろとしたところに掘られてあつた。朝の草の露、黄い名の知れない小さな花、讀經がすんで棺を下におろすと、人々が合掌して土塊を其上に落した。再び湧きかへつて来る悲哀に堪へないやうにお薦は白い手巾を眼に當て、ゐた。

九時すぎ

「照子姐さんはまた歸つて來たんですね。」

「さうですツてね。」

「矢張、さう好いことばかりはないと見えるわね。」

「こんな噂が其處等近所に住んでゐる妓達の口の上つたのは、秋になつて草花などを見に行く人



が大勢土手を通る頃であつた。降り続く雨に心配した洪水も何うやら無難に通つて、此頃では著しく減水した川の上を往來するベンキ塗の小蒸汽に毎日晴れやかな夕日がさした。

「さうだらうよ、お前……。一度襦を取つたものが堅い商家のお上さんなんかになれやしないよ。商家なんて忙しいもんだもの。」照子の家のすぐ前の藝者屋の母親はかう言つたが、段々照子の歸つて來たに就いての噂がいろ／＼とあたりに取沙汰された。そんなに好いんぢやないんださうですよ。引いた時に、二千圓貰つたなんて丸でうそですとさ。やるツていふ證文だけなんです……。今度なんかでも、旦那の父さんや何かに氣が合はないで、何うしても手を切つて了へツて言ふんですツて。そのことで、旦那も當分大阪か何かにやられたツて言ふ話ですよ。何處からか聞いて來てこんなことを言ひ觸すものなどもあつた。

「もう、幾月位でせう？」

「さうね。引いた時が四月だツて言つてゐたから、七月位ね。」

「もう眼に立つかえ？」

「さうね、さう思つて見れやわかるけれども、割合に小さいわ。」

「お産が大變なんだツてね、あの人ののは――。今の坊やさんを産んだ時でも、三日も四日も苦んだツてね……。照子さんも、あの子の旦那が生きてゐると仕合せだつたんださうだけれどね……。お婆さんいつでも滴してゐるよ。」

「あのお婆さんの言ふことは解りやしない。」

そのお婆さんが、照子の先の旦那の男の兒を伴れて突當りの風呂に出かけて行く姿を其處等の人達はよく見かけた。何うかすると、照子が自分で作れて行つてゐることなどもあつた。今年七つになるけれど、發育不十分の低能兒で、碌々口もきけなければ、近所の子供達に雜つて一緒に元氣よく遊ぶでもなかつた。終日家の中に引込んで玩具などを弄つてゐた。隣の年増の藝者が箱根土産に買つて呉れた木製の鐵砲の音が時々ボカンボカンと其處から聞えた。

格子戸の前で遊んでゐると、

「坊やさん！ 坊やさん、母さん、歸つて來て、嬉しいでせう。」

こんなことを通りすがりに言つて行く藝者などもあつた。

すぐ前の家の抱妓は、よくすかして家に伴れて来て菓子などをやつた。

「母さんとお婆ちやんと何方が好き？」

「お婆ちやん。」

「母さんは？」

「母さんは嫌ひ。」

「ぢや、小父さんは？」

「お父ちやん？ お父ちやんは好きだ。」

かう言つて、貰つた菓子は其處で食はずに、「お婆ちやん、お菓子。」と言つて、格子を明けて入つて行つた。今の旦那をお父ちやんツて言はせてゐるのね。など抱妓は姐さんに言つた。

其處の藝者屋で、餘つた酒などがあると、家には飲む人がないので、「酸ばくして了はない中

にお上げよ。」と言つては、よく照子の許へ持せてやつた。と、「これが、何より可愛いよ。私の息

子はこれだよ。」など、言つてほく／＼照子の母親が喜ぶので、後には、「お婆さん、また息子をつれて来たよ。」など、言つて藝者屋の母親は袖の下から徳利を出して渡した。

さうかと言つて、さう大し、澤山飲むといふでもなかつた。精々二合、多くつて三合位であつた。しかし、酒を飲むと、馬鹿に元氣がよくなつて、ちき啖呵を切つたり、昔、仲にゐた時分の自慢話をしたり、娘の意氣地なしを罵つたりするので、照子は成たけ酒を飲ませないやうにしてゐた。

「お母さん、黙つてお出でよ。」

「黙つてゐられないよ、嘔ちやないよ。酒の二合位買ふのは當り前だよ。お前たちばかりで好い事をしてゐるやうたツて、それはいけないよ。」

こんな聲が以前にもよく外に洩れて聞えた。「照子さんのお婆ちやん、また酔ひちやんだよ。」など、近所ではよくその噂をした。

その細い通りにはいろ／＼な人が住んでゐた。主に藝者屋が多かつたが、中には堅氣な人達も住んでゐた。千息が海軍の軍醫をしてゐるといふ白鬚のお爺さんの家からは裏の待合の庭が見えてゐた。其隣には、役者を亭主にして、相談づくで、別に旦那を家に入込ませてゐる藝者などがゐた。角には子供が大勢ゐて、綿の出た蒲團などがよく二階に干してある相埒屋さんだと云ふ一家族が住んでゐた。

その通を袂を取つた藝者だの、玉帳をぶら下げた箱屋だのがよく通つて行つた。奥の藝者屋は待合を兼ねてゐたが、その養女だといふ綺麗な中姐さんは、夕方になると、白地の浴衣にへこ帯をだらしなくしめた男と一緒に角の玉突場へと出かけて行つた。抱妓達はその男を見さん見さんと呼んでゐた。

照子の家の傍には、細い通があつて、そこを行くと、裏には百坪ばかりの空地に、夏は一面に

草が茂つてゐた。夜は螢などが飛んでゐた。何うかすると、闇の夜などに、男と女とが其處で何かそこそそ話をしてゐるのを見かけることなどもあつた。呆れて了ふよ、誰があそこにいるかと思つたら玉の家の女中と政どんが暗の中に立つてゐるぢやないか。家のお常なども油断がなりやしないよ。こんなことを其處の藝者屋の母親が言つてゐた。その空地からは、路がまた細くなつて、溝の水が溢れてグチャグチャしてゐた。炭依の空いたのや板片などが其處に置いてあつた。でも、通りに入る近路なので、其處に住んでゐる人達はよくそこを抜けて通つて行つた。矢張、其の近所の藝者屋に入込んでゐる一人の男は、女と一緒に其處を通りながら、「こゝは新派の芝居か、活動などに好いね。お前が歩いて行く後から、僕がピストルか何かを持つて、この女。この薄情女！ 思ひ知れとか何とか言つて、ズドンと一發放つと、お前が泥の中にはつたりと倒れる。裾がまくれて白い足が出る、胸からは血がだら／＼流れる、何うしても新派だ。しなど、言つて笑つて歩いた。その細い路を出た處には、評判の娘の烏屋があつて、何うかすると、夜は三味線の音が賑やかに聞えた。

この界限の人達は、皆照子の旦那をよく知つてゐた。その旦那は、照子より年が三つ四つ下で、何でも日本橋あたりの化粧品問屋の若旦那だといふことであつた。元の旦那が死んで、照子が二度の勤めに出たのは、今から三年ほど前のことであつたが、一年ほどは好い旦那も出来ずに唯ぐづぐづに暮してゐた。それが昨年の春あたりからふとしたことから今の旦那と出来て、「照ちやんが旨いんだよ、今にあの旦那がつまるにきまつてゐるよ。」などと、多くの妓達に言はれながらたうとう離れることが出来ずに懐妊までして了つた。「照ちやんは人情深いのよ、屹度……。すぐあ、出来て了ふんだから。」ある老妓はこんなことを大勢の中で笑ひながら言つてゐた。

去年から今年の春にかけて、若い旦那は殆ど毎晩のやうに通つて來てゐた。士手から下りて入つて來る細い通には、日が暮れて一時間ほど経つと、屹度チリリンといふ俵の鈴の音が聞えた。「そら、照子さんの旦那。」

かう誰も彼も言つた。

旦那は中折をかぶつて、角帯をしめてゐた。いかにもやさしい人柄な男で、近所の抱妓達は、

「好い男ね。伊井に何處か似てるわね。」などと、噂をした。前の藝者屋の一階からは、照子の家の中が一目に見えるので、遠慮して、成だけ明けないうやうにしてゐるが、それでも、照子と旦那と取勝か何かで睦まじさうに酒を飲んでゐるところなどがをりをり見えた。酔ふと旦那は清元を唄つた。

「奥の兄ちやんより、程好いわね。」

など、抱妓達は言つた。

三

照子が日本橋の本宅に行つてゐた間は四月位であつた。其間、母親と前の旦那の子とはさびしさうにして暮してゐた。母親は花牌が好きなので、何うかすると近所の人達を集めて、遅くまで引いてゐることなどもあつた。しかし大抵は、酒を飲んでその子を抱いて早くから寝た。軒燈が徒らに閉じた格子を照してゐた。

「結構ですね。」

「など、前の藝者屋の母親が風呂で一緒になつて聲をかけると、

「海のものとも川のものともまだわかりやしませんよ。内輪が中々難かしくつてね」

「でも結構ですよ」

「何ですか——若いもの、やることは——」など、言つてゐた。

照子が歸つて来て二三日経つてから、照子の母親は何かの用事で、前の藝者屋へとやつて来た。

「私の考へた通りでしたよ」

「何故です。」

「何故つて、お前さん、若いもの、やることはだらしが無いよ。餘り意氣地が無いんで、苦々しくなるよ。」

「何うしてですえ？」

「だつて、今度のことだつて、皆なあれがわるいんですの。だから、素人の家になんか入つて

駄目だつて、口の酸くなるほど私は言つてきかせたんだよ。何ういふもんかあれはちき夢中になつてね。その癖、浮氣も随分する方なんだけども……。」

「旦那は此頃何うかなすつたんですか。」

「それがさ、あの人がまた若いもんだから、何とそんなことはしないでも好いものを、あれの爲めに親と喧嘩なんかしたんだよ。あの人が親を打つたとか何とかいふ騒ぎになつて、今ぢや大阪の店の方にやられてゐるんですよ。」

「まア左様ですか。それは御心配ですね。けどら向うさまでも、お子さんまでおあんなさるんだから、大切にはして下さるんでせう。」

「何ですか、面倒で仕方がないんですよ……。昨日も先方から人が来て、何の彼のつて面倒でね。……それに、大阪の旦那の方からは、お店の人のいふこととは丸で違つたことを言つて來るんでね。」

照子の母親はこんなことを長々と話して行つた。一時はあんなに好い好いつて羨しがられたけ

れど、照子さんの内所だつて餘り好いんぢやないね。其處の中姐さんは後で母親にかう言つた。その中姐さんの家には、大きな商人の番頭だと言ふ人が一週間おき位に来ては、こつそりその二階に泊つて行つた。始めは近所の人々もその姿を見たことはなかつたが、隣の相場師の細君がある胡歸つて行く姿を勝手元で茶碗を洗ひながらちりりと見て、「あれがお隣に来る人だよ。かう言ふと、其處に寢衣姿で齒を磨きに来てゐた亭主は水口からちよつと覗いて見たが、「あの人。あの人はよく土手の近所で見かけるよ。けれども、あの人ばかりぢやないんだらう、隣に来るのは、鬚の生えた四十位の人も来て泊つて行くぜ。」など、言つた。

その中姐さんは梅香と呼ばれてゐた。かなり賣れる藝者で、藝もあれば容色も好かつた。それに七三で置いた妓が旨く當つて、毎月百五六十圓も拂いた。「お宅のはよく賣れますね。羨しいやうね。」表ではこんなことを言ひながら、裏では「何うしてあんな妓が賣れるんだらう。不思議のやうだね。」などと、噂した。

この梅香、奥の藝者屋の養女の秀松と交情が好かつた。兩方でよく遊びに行つたり來たりした。

梅香の方は才ばしつて、伶俐で、何んな話でも流るやうに出て行くといふ風だが、秀松はイヤに落附いて、押黙つて、お座敷に出てても滅多に口もきかないといふ質であつた。近所の評判では、表面秀松の日那にしてゐる兄ちやんと言ふ人は、秀松の養母で今そこで津の國屋といふ待合をしてゐる女將とも同じく出來てゐて、兎角内輪が揉め勝で、此間も大喧嘩があつたなど、いふ話であつた。「お前さん、もうすこししつかりおしよ。除り黙つて落附いてゐるからいけないのよ。」など、見かねて梅香が言ふと、「だつて、私、何か言つたつて、しやうがないんだもの。母ちやんには敵はないもの。」など、矢張落附いて平氣で言つてゐた。「秀ちやんのは、兄ちやんにほれてゐるんだか何だかわかりやしないよ。見ても齒痒いやうよ。だつて、私、困るんだものなんて言つてゐるんだもの。」梅香はかう母親に話した。

その癖、二人は交情が好かつた。珍らしいものがあると、互に持つて行つたり持つて來たりした。時には二人で三味線を合せて、互に持つてゐる小唄のうつし合をしたりした。

「せかれせかれてくよくよ暮らすエ

たまに逢ふ夜はせかれては逢ひ

あひではせかアれ

わかれともない明の鐘……

秀松の本調子に梅香の三下りがよく合つて聞えた。初め秀松がこの小唄を梅香に教へたり「好いわねえ。うつして頂戴よ」かう言つて梅香は繰返して三味線を弾いた。筆のかさの合の手ところがあるわねえ。あそこを豊子姐さんはかう弾くけれど、私の教はつたのはさうぢやないのよ」秀松はかう言つて、それを自分で弾いて見せたりした。秀松は二三年前柳橋の方に出てゐた。秀松の家には、近所の人達がよく電話をかりにやつて來た。それは照子の母親、梅香の母親、政勇といふ自前の姐さんなど、いふ人達であつた。電話は抱妓達の大勢あるところにあつた。あそこ位不愛想な家はないよ。電話を借りに行つたつて、ふんつて言ふ顔をしてゐる。抱妓達までさうなんだから腹が立つよ。何も唯で借りてはしまし、つけとゞけは餘りかへるほどしてあるのに……。こんなことを言ひながらも、檢番の電話ではかけにくいことがあつたりす

るので、何ぞと言つては、人達はそこに驅け出して行つた。

月の薄明るいある晩のことであつた。梅香が秀松と長火鉢のところでは話してゐると、突然抱妓のゐる方で「小メさん 早く、早く。」といふ聲が聞えた。梅香が入つて來る時に土手下の自前の小メが其處で何か言つてゐたのを見たが、その聲のけた、ましいので、吃驚して振向くと、小メは縁側つたびに慌て、跣足で奥の方へ逃げて行つてゐた。

「何うしたの？」

かう言つて梅香と秀松との立上つた時には、白地の浴衣を着て、片手に笏物を持つた遊び人らしい男が、血相かへて其處に棒立に立つてゐた。頻りにそれを遮つてゐる女將の姿も見えた。

「小メを出せ。」

「メちゃんなんかありませんよ。」

「ゐないことがあるものか。今、入つて來たのをちやんと見て知つてゐるんだ。」  
「だつて、ゐやしないもの。」

「出せッて言つたら出せ！ 隠すと承知しないぞ、皆な叩き殺すぞ。」

蒼青な顔をして、手をぶる／＼と震はせてゐた。「お前さん、こんな危ないものを持つて何うする了見だえ……。」かう言つて、女將がそれをもぎ取らうとした。男は手拭にくるんだ。及物を高く持上げたし。

「何うしたんです？ 一體？」

「何でも好いから、あの女を出せ！」

「ゐないのを出しやうがない。」かう言つた時には、女將の態度はもうすつかり落附いて來てゐた。

「お前さん、無暗に人の家に入つて來て、及物なんか持つて、女だと思つて馬鹿にしちやいけな。」

「よ。」

「出しさへすれや好いんだ。」

「ゐないといふのに、解らないねえ、この人は？ 何處か他をさがしてお出でな。」

「來てゐたに相違ない。俺が見てた。」

「一體、何うしたの？ やさしく言つたッてわかるぢやないの？」

梅香は傍から靜かに言つた。

「ごたく／＼してゐる間を、小は裏の明家に入つて蜘蛛の巢の中にぶる／＼震へてゐた。もう大丈夫。」かう言つて抱妓が其處から伴れて來た時にも、顔はまだ蒼青になつてゐた。「一體何うしたの？」かう聞かれて小ははかいつまんで其話をした。「ちやお前さん惚れてゐた譯ぢやないのね、さう？ 旦那の處へそんなことまで書いてつたの？ 困るわね、それは——それで、鶴藏さんとは何うしたの？ あの男がゐるために、そつちにも行けなくなつてゐるのね。困るねえ？」などと女將は顔をしかめながら言つた。「兎に角もう少し隠れてお出でよ。まだ其處等にぶら／＼してゐるかも知れないから……。しかし、本氣ぢやないよ。あんな本氣があつて堪るものか、向うで震へてゐるぢやないか。狂言よ。威嚇してやる積りか何かよ。」

「さうね。あんな浴衣なんか着て、今時分、狂言よ。」

秀松は傍から言つた。



お座敷がか、つて来て梅香が外に出た時には、外にはもう其男はるなかつた。朧ろけな月が靜かに家々の黒い影を地上に落してゐた。照子の家の前に來か、ると、ばつと入口が明るくなつて、格子が明いて、そこから照子が出て行つた。一間位離れて歩いて行く黒い男の影が前に見えてゐた。「旦那が歸つて來たのかしら？」かう思ひながら、梅香は自分の家に入つて行つた。

四

毎朝十時頃、その細い路から土手の方へ出て行く二人の婆さんがあつた。二人とも藝者屋の母親で、二人とも梅毒から來た眼病で、毎日誘ひ合つて町の醫師の許へと通つて行つてゐた。二人は話しながら歩いた。

「照ちやんの旦那が歸つてゐるんださうですが、嫉妬で大變なんだつてね。」

「何うして？」

「照ちやんにも何かあるんだとさ。」

「さうですかねえ……」

「お店には内所で、大阪からこつそり出て來てるんださうだけれど、何でも留守中に男が入り込んでゐた手證を見られたとか何とかで、揉めてゐるんだとさ。」

「何處の家にもごたくがあるねえ。」

かう言つた時は、二人は土手の方へ曲る角の處に出てゐた。其處には椅子づくりの藝者屋が一軒あつた。

「さういへば、此處の姐さんも、もう難かしいつていふ話だね。」

「肺病ちや仕方がないねえ。」

「それでも、元の旦那が來て世話をしてゐるんだつて？」

「え、元の旦那つて？ 深川の？」

一人の方が點頭いて見せると、「まア、あの旦那感心だねえ。随分ひどくされたんぢやないか。」だから、今では手を合せてゐるツて言ふよ。後の旦那なんか、病氣になつてから寄りつきもし

ないッて言ふからね。」

こんな話をしながら二人は靜かに土手の上へと登つて行つた。「俵で行かうか、歩いて行かうか。」二人はちよつと相談したが、歩くことにきめたらしく、靜かに一歩々々進んで行く姿が此方から見えた。

眼の性の殊にわるいといふ方の婆さんは、何うかすると宅の爺さんの若い時のことなどを話してきかせた。「一番困つたのは、抱妓に手をつけられることだよ。宅のなんか、何んな抱妓でも手をつけられないものはないんだからね。それが何より一番困つたよ。性のわるい抱妓に踏まれたのもちつとやそつとぢやないよ。此頃だよ、女に氣がなくなつたのは。ほんに此頃だよ。男ッて仕様のねえもんだ。」などと、話した。その時には、一方の方の隣の藝者屋の爺さんの話が屹度出た。「あの爺さん、しみつたれだから、ちよつと氣性のあるものには手が出せないけれども、こいつは大丈夫だと思ふと、今でも當るんだつてね。今の抱妓はてつきりそれだよ。此間も大師様に一緒に伴れて行つたりしたよ。よく氣恥しくないよ。」

軍醫の隠居の話などもよく出た。前の上さんは、よく働く堅い人だつたが、それが去年の春頃に急に亡くなつて、あとに下女ともつかず親類の女ともつかないやうな年増が來てゐた。夏の夜など、よくその細い通りに縁臺を出して、白鬚の爺さんと團扇などを持つて一緒に涼んでゐた。照子の母親などは、花牌の仲間で、「爺さんあ、見えてゐて中々花牌が旨いんだつて。照ちやんのお婆さんがとてもかなはないんだつて。」などと話したが、つひ二三日間、一緒に土手の方に曲るとすぐ「思つた通りだつたよ。此間から、あの年増がゐないと思つてゐたら、昨日遅くこつそり來て、今度木更津の方に片附いたから、あつちの方に來たら是非密つて下さい。網元の傳平ツて言ふと、土地では知らないものはないからツて言ふんだよ。そして、このことにお爺さんに内所にして置いてお呉れといふのだからね。あのお爺さんに巻き上げられて、少し持つてゐた金もなくしたんだね。玩具になつてゐないで唯で金を取られる奴があるもんかね。それはあの爺さんを怖がつて恐ろしがつてゐたよ。お宅では、他とは違つて、滅多なことを仰しやらないから、何處にも申上げないけれども、お宅にだけは申上げるんだつてね。あ、見えて、あの爺さん、中々

「すごい腕だよ。それに、あの年増も並ぢやないわ。女郎上りか何かだね。」二人はこんな話をして歩いて行つた。川にはモーターの音がけた、ましく聞えてゐた。

## 五

大阪から来た若旦那の姿は照子の家にもちよいと見えてゐた。朝など、手拭を下けて風呂にかけて行くことなどもあつた。照子の腹はもうかなり立つほど大きくなつた。近頃では、お扮装も面倒だといふ風で、襦袢になどしてゐることが多かつた。前はやつれて蒼白くなつてゐた。「照子さんの家、餘程ごたごたしてゐるらしいのね。」梅香は母親にこんなことを言つた。人の出入りも多かつた。猪高い聲で物を言つてゐる男の後について若い旦那の細い激した聲が聞えるかと思ふと、娘に向つて母親の怒つてゐるやうな聲も聞えた。格子戸を荒々しく明けて、そ、くさと若旦那の出て行く姿などを近所の人達は見た。

男の兒がさびしさうにして格子戸の前に立つてゐるのを、抱妓達がつれて来て、

「お父ちゃん、歸つて来て嬉しいでせう。」

など、訊くと、男の兒は何も言はずに、唯頭を振つて見せた。

「お土産を澤山貰つたでせう。」

矢張頭を振つてゐた。さびしさうに笑つてゐた。

ある夜遅く梅香がお座敷から歸つて来ると、「大變だつたよ、今日は照子さんの家——。」かう言つて、母親はその話をした。「何でも、お前が掛けて行つてから少し、てだよ。何かごたくしてゐると思ふと、照子さんとお婆ちゃんとお旦那と三人で大喧嘩さ。餘り見兼ねたから、私とめに行つたんだがね。何でも照ちゃんはその男とかに、「だつて洋装位拵へてやりたいよ」とか何とか言つたんだとさ。そんなことを言はなけりや好いのに……。それでなくつてさへ、自分の子供だか何だか知れない位に旦那は此頃疑ひ出して来てゐる矢先だから堪らないよ。母さんはそんな真似をこれにさせて黙つてゐたのかつて旦那は怒り出す。照子さんは泣き饒舌にしやべる。大騒ぎさ。それに、お金のこともあるやうだよ。此頃の身分では、旦那も金が元のやうに廻らな

くなつたんだね。それを、ちよい／＼口に出して言ふと見えるんだね。仕方がないから、私とお隣の政ちやんと二人で漸くなだめては来たがね。照子さんだって、あの腹だもの、むしやくしやしてるんだよ、お前。」

「旦那はそれで自分の子ぢやないって思つてゐるの？」

「さうでもないだらうけれど、離れてゐると、さういふ風に氣を廻すと見えるんだよ。照子さんも、あんまり何かイヤなことを言はれるもんだから、中腹になつてゐるんだよ。」

「そんな男があるのかしら？ 本當に？」

「それはわからないよ。旦那はそのことを頻りと言つてゐたから……。」

その話のあつてから、旦那はまた大阪に行つたが、それも長い間ではなく、十日ほどすると、またその姿を近所に見せた。ある時には、旦那が自分で警察の刑事に頼んで、花牌を引いてゐる中に踏込ませて、照子と照子の母親とを分署まで引張つて行かせて、それをあとで金を使つて自分で取下けたりした。「何うかしてゐるんだよ、あの旦那、氣が何うかしてゐるんぢやないか。」後には

近所でもかういふ噂をするやうになつた。

それは十月の末の月の明るい晩であつた。照子の家では、宵から旦那が来て、何かごた／＼話聲が聞えてゐるが、丁度九時少し過ぎた頃、「貴様のやうな奴は勝手にしやがれ、一生もう逢はないから、さう思へ！」かういふ聲が聞えたと思ふと、格子戸がガラリと明いて、人の驅出す音がけた、ましく聞えた。

「待つて頂戴！ 言ふことがあるから待つて頂戴！」

かう言ふ金切聲と共に、あとを追つて續いて女の驅け出した氣勢がした。

何處の家でも皆な驚いて外へ飛び出した。梅香の母親の出た時には、跣足で、散し髪で、照子の走つて行くのが見えた。走つて行く旦那の外套も月の光にそれと見えた。

「待つて頂戴！」

金切聲が四邊に響いて聞えた。

しかし旦那はそんな奴から聞くやうなことはないといふ風で——むしるさういふ苦痛と焦燥と

から全く死んで了ひたいといふやうに、急に足を早くして土手の方へと驅けて行つた。

「待つて頂戴！」  
女は氣違のやうな聲を漲らせながら、月の光の中を一生懸命に追ひ蒐けて行つた。あとから梅香、母親だの、梅香だの、秀松だの、白鬚の爺さんなどが續いて驅けて行つた。

「待つて頂戴！」  
土手の上で、女が辛うじて男に追ひ附いたのが此方から黒く見えた。土手の上からはキラキラと川に碎ける月の光が美しく給のやうに見えてゐた。

女が何か一言三語言つたかと思ふと、「貴様のやうな汚らはしい奴と口は利き度くない。」と言ふ聲がして、男は女をぐつと前に突き飛ばした。女は墮跟とした。

「ちや殺して頂戴！」  
女は男の方に身を寄せて行つた、男は女の頬を烈しく拍つた。  
「打つて頂戴！ もつと打つて頂戴！ 殺して頂戴！」

「勝手に死にやがれ。」

「死ぬとも……勝手に死んで見せるとも」かう言つたかと思ふと、女はイキなり土手の上から河に向つて身を跳らした。凄じい音がしてサツと水煙が立つた。

後からついて来た細い通りの中の人達は、土手に上るとすぐこの光景を見て、吃驚して、慌てて助けを呼んだ。丁度その時飛び込んだ二三曲光のところは一艘の傳馬が靜かに通つてゐたが、それと急いで櫂を漕いで船を此方へと寄せて来た。暫しの間髪を亂した女の體が浮いたり沈んだりして流れて行くのが月の光のキラキラする中に明かに見えてゐた。

近所にある車夫と船頭とが漸くそれを引上げた時には、照子はもう半ば感覺を失つてゐた。車夫の腕に抱かれて、唯ぐつたりとしてゐた。照ちゃん、氣をしつかり、氣をしつかり、など、いふ女達の聲が聞えた。大勢集つた人の影は黒く濃く地上に落ちてゐた。

「旦那は一體何うしたんだらうね。」  
かう女達の一人は言つた。

「照ちやん、しつかりおしなさい。」

かう聲をがけられても照子は矢張ぐつたりとしてゐた。首と手とがだらりと下つた。髪はぬれた白い肌にくつつ附いてゐた。

種々なことをガヤガヤ言ひながら、細い巷路の方に土手から下りて来る一行の黒い影は、月の光の下に明るく見えてゐた。角には誰も彼も皆出てゐた。小ぢも出てゐれば、眼のわるい二人の婆さんも出てゐた。その中を車夫に負はれて家の方へ歸つて行く照子の顔は、半ば死人のやうに蒼白かつた。

# 傘

佐原行の汽船は漸く小さな埠頭を離れた。たぶくと岸に動く藻や蒲の緑葉、黒く淀んだ水脈は俄かに大きく波の畝をつくつて、岸に連つた二階屋の低い漁師の家や干した漁網などはすべて靡いて動いて行くやうに見えた。

船尾の一等室には、右から日影がさし込んでゐたが、そこには土地の商人らしい男と、肥つた佛手柑のやうな顔や手足をした紳士と、三十七八の妻と八九歳になる男の兒を伴つた勇肌らしい亭主とが乗込んで、頻りに出帆の遅れた話などをしてゐた。亭主の後には大きな鞆や信玄袋が隅の

方に押寄せられるやうにして置いてあつた。

「待ちましたな。」

「本當にこれだから、此處の汽船はいやになりますねえ。」

かう細君が言ふと、

「でも、今日は特別ですよ、二十十日の荒れ日ですから。それを氣遣つて、朝の中ぐづ／＼してゐるんですな。なアに、ちつとやそつとしけたつて何でもないんですが、此處は——。漸く濁々と展開して來た湖水を見廻すやうにして、商人らしい男は言つた。

「荒れますかね。」

「なアに、大したことはありませんや。」

肥つた紳士は、白いリンネルの服を着てゐた。かれも汽車から來てその埠頭に三時以上も待つた。かれはぢきその先の〇といふところに行くのであつた。この位ならすぐ俵で行けば好かつた。後俯した。

「えらい目に逢ひましたよ、日がへりをするつもりでやつて來たところが、そのためにすつかり順狂つた。」

「船には、時間があるやうで、實は時間がありませんや。」  
かう亭主は出子合せを合せた。

しかし兎に角汽船は出た。これで、乗客は皆その思ひ／＼のところに着くことが出来るのである。人々の心は待遠であつた汽船の埠頭——茶屋、旅館の二階、色の白い上さんのゐる氷屋、退屈まぎれに買つて食つた饅頭、漸く入つて來て横付けにされた汽船、船頭の懸聲をして積込んだ荷、さういふものから段々離れて行つた。

と、急に、

「あ、何うしよう！」

かう細君は言つた。

亭主も乗客も皆な其方を見た。細君は焦茶色の蝠傘を手にして、「取替へて來ちやつた！」

「それやお前んぢやないのか！」

「え……。困つた。動いてゐる汽船をあとへ戻して、取替へて來ることは出來ないかといふやうに、中腰になつて、今出て來た埠頭の方を見た。

渠等が午飯を食つた旅舎の二階はまだそこからはずきりと見えてゐた。

「馬鹿な、何うしたんだ！」

「私の傍に、二人づれの夫婦がゐたらう。あの人のですよ、これは——同じ色だつたから……」

「お前が取替へたのか？」

「つい……知らずに……」

「馬鹿な奴だな。」

かう言つて亭主はその蝙蝠傘を妻の手から取つて、あちこち翻して見てゐるたが、「お前の方が好いのか。」

「それは此間買つたばかりだもの……。困つた……」

かう言つて細君は暫く考へ込んだ。

乗客達はこの不意の出來事に興味を持つて、半は同情したやうに、半は好奇の情に動かされたやうにして、その夫婦の方を見た。商人は小さな蝙蝠傘を取つて見て、「これだつて、好い傘だな。これだつて五六圓はすらア……」ひつくり返して見て、「さうだ。あの夫婦づれのだ。確かにさうだ……。あの衆は、しかし、この汽船には乗らなかつたかな。」

「鹿島まで行くんだから、この次の二時に乗つて行く方が好いつて言つてあとへ残つた筈ですな。」

かう紳士は笑ひながら言つたが、これもその蝙蝠傘を手を取つて見て、

「それでも好い方を持つて來たんぢやないから、此方に悪意のないのはわかつてゐるけども……」

「本當にしようがねえな。」

かう亭主は妻を見て言つた。

傘



暫くしてかう細君は言ふと、

「俺はいやだぜ、そんなおつき合ひは——。取替へるなら、お前一人残つたら好いだらう。」

「さうする、私……。」

また沈黙が續いた。

「この汽船はAにもSにも寄つて行くでせうか？」

「寄るだらうと思ふが、風の都合で、何うかすると、寄らないこともある。」

「ぢや、私、かうする……。私、すぐ其處のOで下りて、二時の汽船の來るのを待つて、そして取替へて行きます。」細君は決心したやうに言つて、「さうすれや取替へては呉れるでせうね。」

「それは呉れるとも……でも、お前、取替へて持つて來て濟まなかつたツて、此方からあやまるんだぜ。」かう亭主は言つてきかせたが、「でお前は何うするんだ。二時の汽船は、AにもSにも寄るか何うかわからないぜ！ 寄れば好いけれど、寄らなければ、三里も四里も歩いて來なくつちやならないぜ！ 夜になるから、殊によると泊らなくつちやならないぜ！」

「でも、折角お母さんに買つて貰つた蝙蝠傘で、まだ二三度きりさ、ないんだから……。母さんにわるいから……。」

「ぢや、さうするさ。泊るとすると、金も入るぜ！ 持つてるか。」

「私にある。」

細君は帯のところに手をやつて見せた。

ひよつとした間道から、折角の旅——亭主の故郷へ墓參の旅の興味がすっかり殺がれて了つたのをかれ等は感じた。亭主は「勝手にし、」といふ語氣を見せたけれども、それは實は妻の不注意に對する腹立で、さうかと言つて妻をひとりあとに残して自分だけ旅を續けるのも不安で不愉快であつた。折角かれ等は喜び勇んで今朝都の停車場を立つて來た。十圓近くする涼傘、かの女のこれまで持つたことのない涼傘、それに金の指環、着物も明石を着て、髪も綺麗に結つて、平生眞黒になつて働いてゐる世話女房とは誰も思はない位に支度して來た。かれ等は長い間艱難と辛勞とから漸く近頃浮び出した。亭主もあらゆる社會の勞働をつゞけて、漸く人の四五人も使ふ

身分になつた。この前、亭主の母親の死んだ時に細君は初めてその湖畔の亭主の故郷に行つたが、その時から比べると、ぐつとから等の生活も樂になり、その頃企てゝゝるた小さな工場の事業も成功の緒につきつゝあつた。従つてこの旅では、かれ等は汽車も二等でやつて來た。故郷に誇る土産物などもそれ〴〵準備して來た。下りた船着でも、ちやんと旅舎の二階に上つて、上流の人達のするやうに午飯も食ひ茶代も置いて來た。

で、兎に角、細君はさう決心した。二時の汽船を〇で下りて待つことにした。しかし考へるとそれも頗る不安である。〇で下りて待つてゐても、この次の汽船が其處に寄るだらうか。寄なければそれまで、ある〇〇に限らずAでもBでも同じである。かう考へると、汽船の必ず寄航するUまで行かなければその女達に行逢ふことは出來ないやうな氣がする。Uはまだそこから非常に遠い……。

「大丈夫ですよ、寄りますよ。」

かう肥つた紳士は言つた。

「風さへなけりや、皆な寄つて行くんだが……」

こんなことを言つて、商人は廣々とした湖水を見渡した。

汽船は絶えず波を截つて航行した。風は南から來た。荒日にしては非常に靜かな天候であるけれども、それでも舷側に當る波はかなり高く、ともすると、船が左右に動搖した。

「馬鹿々々しいことをしたな。」

かう度々亭主は言つた。細君は黙つてゐた。

自分の方の蝙蝠傘が好いといふことが、新しいといふことが、何遍となくかの女の胸に上つて來た。

「だから、向うでは喜んでゐるわけですな。」かう商人が軽く言つて笑つた時には、先方ではそれを自分のものにするために、わざ〴〵下りて取替へに行つても、「い、え、これは私のです。」と言ふかも知れないといふやうな氣がした。自分の蝙蝠傘をよろこんでひろげて見てゐる女の顔——その肥つた色の白い顔があり〴〵と見えた。

實際、此方でその蝙蝠傘をひろけたり閉ぢたりしてゐると同じやうに、先方でも、あの二階で蝙蝠傘をひろけたり閉ぢたりしてゐるに相違なかつた。その夫婦づれの亭主の田舎臭い姿なども歴々と見えた。

「鹿島に行く人には違ひないんですね。」

不意に細君は商人に訊いた。

「それは鹿島に行く人にや違ひないんです。さう言つて、二時の汽船にしたんですからな。やつて來ますよ。大丈夫ですよ。〇で待つてゐりや。すぐ來ます。この汽船が後れたから、あとののは二時にはきつと出ます。」

やがて〇が近くなつて來たことは、岸の緑が近く、蒲葦のたぶくと水に揺れて見られるのも知れた。さびしい岸には小さな家屋が一二軒ほつくと見えるばかりで、そこらに村があらうとは思へないほどであつた。

艇が一隻ゆらくと此方に近よつて來るのが見えた。

肥つた紳士は、鞆を携へて、室の外の舷側へと出て行つた。

細君も下りる決心で其方に行つた。「何うかそれぢやお願ひします。」など、亭主はその紳士に頼んだりした。かと思ふと、「いゝぢやないか、おい、あきらめて了へな。傘はまた金さへ出せや買へるア。」など、言つた。しかし細君は決してあきらめて了はなかつた。

艇が來ていざ乗らうとするころになつてから急に、此處で上陸して待つてゐるよりも、Aで上陸して待つ方が好いといふこととなつた。かれ等の故郷はSで下りるのが順路だが、Aなら、そこから歩いて行つても二里に近い……さうする方が好いでせう。無論Aには寄りますよ。「かう商人も言へば亭主も言つた。船の事務員に訊いても、Aには無論寄航するといふ話であつた。で、紳士だけそこで下りた。」

客と荷物とを艇に移して汽船はまた動き始めた。

波は段々大きくなつた。

湖水も次第に濁く濁くなつて行つた。見わたす限り森漫として海のやうである。帆がところどころ

ころに浮んでゐるが、その向うに遠く微かに陸地が見えるばかりで、唯白い波頭ばかりが颯つてゐる。汽船はかなり深いト下動をなして揺れた。

〇からは親子連の紳士が乗つた。その人達もしからKへと行く人だといふことがやがて解つた。子供は十歳ばかりで、白い紺の着物に袴を穿いてゐた。

長い間には編蝠傘の話ばかりはしてゐられなかつた。細君がひとり困つたやうな顔をしてゐるのを餘所に、亭主と商人とは種々な話をした。汽船の話、湖水の魚の話、それから商賣の話になどなつて行つた。流石に地方を同じうしてゐるもの同志だけに、何を話してもピッタリと話がよく合つた。商人が「さうですか、酒はお強いですか。私も若い時分は少しはやりましたが、今ぢや一合ですな。一合やりやもう寝るばかりです。」かういふのに對して、亭主は傍にあつた空になつたウキスキイの小櫃を示して「何うも、こればかりはやめられませんか。酒でもなけりや生きてゐたつてしようがない位なものでさ。これも今朝汽車の中で半分やつて、あとは船の中と思つたんですが、待つたもんだから、あそこでやつちやつた……」など、言つて笑つた。

段々亭主の自慢話なども出て來た。今では工場の方には十五六人も職工がゐるなど、言つた。その辯歩く話になると、「なアに二里や三里は、この位の荷物を俺が負つて行くのは、何でもないがな……」など、言つて、昔若い頃、麻布から横濱まで荷車をひいて日附に歸つて來た話をした。かれは又この故郷で漁師や肴屋もしたことがあるらしかつた。従つて湖水で獲れる魚の種類、風の方向などによく熟してゐた。ある時は、非常なしけの中を平氣でかれは兄と共に船を出した。「風の強い時には、船は波の上から波の上へと飛んで行きまゝさ。一直線です、船頭や漁師をしてゐちや、波や水が怖くつちや一日だつてやつてゐられやしませんや。その時なんか、えらい目に逢ひましたぜ。船が丸で波の中です。突然、ドンと體の外れた音がした。見ると、兄貴はゐない。びつくりして向うを見ると、兄貴の頭が波の中にある。それツて言ふので、棹を出してやりましたが、この湖水なんか、いくら荒たつて大したことはありませんや……」

「兎に角、何處でしけに逢つたつて、一時間も経てば、何方かの岸につくんですからな。」

かう商人は調子を合せた。

亭主も今は決心したらしく、「ぢや。爲方がねえ、さうするさ……。Aで俺も下りるア。そして荷物は俺が負つて行つてやらア。たゞ閉口なのは、Aで二時間も待つのは大變だが、何うもしよ  
うがねえ。」

「ぢや、着物を着改へませ。か。」

「さうする方が好いや……。それにしても、えらい眼に逢つたな、午少しすぎ位にや着いて、今日の中に墓参をしてえと思つたから、十五日の盆にやつて来たんだ。それに、あそこでうんと待たせられて、また、Aで二時間、今日は初めからぐれはまつゝきだ……。かう投げるやうに言つて  
「本當にあきらめて了へば好いにな、金さへ出せやいくらでも買へるぢやねえか。」

矢張細君の黙つてゐるのを見て、商人と顔を合せて笑つて「女はこれだから困らア。何うもあきらめが好くねえ。男はかういふ時は好い氣前を見せるがなア。何だ、一體、傘一本位……。」

「さうは言へませんや、女には……。男とは違つてますから……。」  
かう言つて笑ひながら商人は細君の方を見た。

細君は靴をあけて、自分の不斷着と帯とを出した。

「俺のは此方か。」

かう言つて亭主は信玄袋の方の口をあけて浴衣を出した。

「坊主は歩けるかな。」

「歩けますよ。」

「夜になるかも知れんぜ。」

「さうしたら、私が負ふ……。」

「まア、しようがねえや……。」

亭主はどつかと其處に胡坐をかいた。

此間にも汽船は此方の岸に寄つたり彼方の岸に寄つたりして航行した。船の廻轉するにつれて、日影が左の窓からさしたり右の窓からさしたりした。時には解は右舷に来て留り、時には左舷に来て留つた。さう大した高くない山も、半ば雲の裏に蔽はれて高く遠く仰がれた。

豫期した風もさう大して強く吹いては來なかつた。朝の中はいくらかは荒れるだらうと思はれた雲もいつか模様を改へて、白い鼠色を雜せた雲が青空の處々にほつ／＼丸まつて出てゐるばかりであつた。

「大丈夫だ、大丈夫だ。いけの雲ぢやねえ、これぢや船はAにもさにも寄らア。」かう亭主はいくらか安心したやうに言つた。

やがてAの湖岸は近寄つた。

「A上りの方は、御支度をなさい。」かうボオイが一等室に聲をかけて行つた。で、商人もこゝで上る支度をした。「さうですか、あなたも此處でお上りですか、もつと先まで行くのかと思つた。」など、亭主は言つた。

岸を離れた艇は、蘆荻や蒲の綠葉のたぶ／＼と水に動く間を漕いで、午後の明るい日をまともに受けながら、艇の一押毎に次第に此方へと近づいて來た。それに近づくにつれて汽船の速力は次第に遅く緩くなつて行つた。

そしてそれが停ると、右に偏つた艇側に影しく波が湧いた。

亭主と細君と子供とは、近寄つて來た艇に艇側から乗り移つた。最初に細君、次に子供、その次に荷物を移して、それから亭主が乗移つた。

やがて汽船は艇を離れて動き出した。

艇が岸に着いた頃には、白いペンキ塗の汽船は、黒い煤煙をあたりに漲らせながら、沖遠く靜かに航して行くのが見渡された。

Aの岸には、茶店が一軒あるばかりであつた。村——村と言つても五六十戸の部落があるばかりであるが、それは松並木の堤防の下になつてゐるので其處からは見えなかつた。下りた人達は荷物を背負つたり擔つたりして松並木の方へと歩いて行つた。商人も挨拶して向うに行つた。

その一行はしかし其處で待たなければならなかつた。狭い一間、しかもそれは西日の暑くさした一間であつた。亭主は其處でも蝙蝠傘の一條を茶店の上さん達に話してきかせなければならなかつた。「それは御面倒でしたな……なアに、二時間も待たねえてもよかんべ。一時間も待てば來る

だ。』など、上さんは同情して言った。

室と相對した厨、其處にある豆腐、油揚げの煮附、爛徳利、さういふものが忽ち亭主の態を誇つた。亭主は立つて行つて、何かあるかな。何に？ 鱸がある。それは難有ていな。それを一つ拵へて呉れねえか……酒でも飲んで待つてゐるだ。仕方がねえ。こんなことを言つて、かれはあくらをかいて、日影の當らぬ處へと陣取つた。子供には饅頭を買つてやつた。

Sの山の眺望の好い處を買つて、別荘を建てたドイツ系のアメリカ人があつた。それが獨探だと言はれて、一時地方の問題になつた。何でも邸の周圍には電線を張つて、そこに萬一を慮つて電流を通じて置くといふ噂であつた。亭主は酒をちびり／＼やりながらその話をした。

「さうかえ、まだゐるかえ。」

「びく／＼してゐるまさアな。」

「出るにも出られず、先生弱つてゐるんだらうな。」

「ちよつとでも出ると、子供達が石をぶつ附けるツて言ふアな……。」

「本當に、獨探かな。」

「さう言ふだがな……。」

「何しろ、始めからあの西洋人けちがついてゐらア、村でも評判がわるかつたからな。それに、女好きでな。」

「さうだつてな……今でもKのものかNのものか一人女が入つてゐるでな。その代り、金はどつさり貰うだ……。」

「まア、いやなつらいところをあきらめて、その金を情人につき込めば同じだ。」

それにも拘らず、細君は唯黙つて蝙蝠傘のことばかり考へてゐた。乗つてゐるに相違ないとは思ふが、もし乗つてゐなかつた時は？ 乗つてゐても、それは私のぢやないと言つた時は？ かう思ふと、多年買ひたい買ひたいと思ひ續けて、漸く母親に半分出して貰つて買つた時の喜悅や、それを始めてさして出かけて行つた時の誇や、道行く人達に振返られた得意さや、さういふシイ

ンがあり／＼と眼の前に浮んで見えた。かの女は取替へて来た蝙蝠傘とそれとを心で比べた。こんなさし古したものではなかつた。同じ焦茶色でも、自分には薄く白く縫ひがしてあつた。形もこんな田舎式のものではなかつた。何うしてもあれをなくしてはならない……。かうかの女は思つた。

此處には屹度寄航すると言ふけれども——確かに寄るに違ひないとその茶屋の人達も言ふれども、もし寄らなかつた時は？ その汽船の時刻が近づいて来るにつれて、さうした不安がかなりに強くなつたかの女の心を襲つて来た。かの女は度々下駄を穿いて、外に出て、湖水の方を眺めた。

「もう来るだらう。」

亭主はかう言つて、胡坐をかいたまゝ、白縮緬の太いへこ帯からそれも誇りの一つらしい金時計を出して、時間を見た。「来たたら、お前行つて来うな……。俺ら此處に待つてるで……。こんなことをも言つた。亭主の顔は酒に赤く、傍には徳利がもう二本空にされてゐた。

夕日は次第に低く、空氣は影の濃い色をあたりに漲らして、湖上に激澗として碎ける光線は、

さながら金屬か何かのやうに見えた。帆が一つ荻の間から浮び出すやうに出て、そして靜かに動いて行つた。

ボウと汽笛の音がした。

下駄を突かけて慌て、外に出たかの女は、夕日を帯びたペンキ塗の白い外輪の汽船が沖から次第に此方へと近寄りつゝ、あるのを認めた。

其頃には、その汽船を待つ人達も既に三四人其處に来てゐたが、その人達と一緒に、細君は船着の方へと行つた。そこに行く間は一二町あつた。細君は舳の船頭に、長々と取替へた蝙蝠傘の話をしなければならなかつた。

「さうですか、よう御座んす。船頭はかう上の空で返事をした。

汽船の着く着かないのは心配はなくなつたが、今度はその夫婦づれが乗つてゐるか何うか心配になつた。好い涼傘を得たのに誘はれて、途中で取替へられる虞を豫知して、一夜其處に泊るかも知れなかつた。又別な方面に行つて了つたかも知れなかつた。かの女はその蝙蝠傘を抱へな



がら、艇の一隅に小さく乗つた。

船頭は棹から艫にと移つて、次第に沖へと出た。

波はかなりに高かつた。誰も立つてゐるものはなかつた。艇はやがて汽船の近寄つて来る航路に行つて、波に漂はされないだけに艫を押して、此方へ此方へとやつて来る汽船を待つた。

ボウとまた汽笛が鳴つた。

やがて近寄つて来た。かの女はいくらか胸の動悸の高まつて来たのを感じた。艇はやがて近寄つて来る汽船の舷側へとつけられたが、一番先へと望んでゐるにも拘らず、先へ先へと争つて乗る人達に遮られて、かの女が乗つた時には、あとには年老いた婆さんが唯一人残つてゐるばかりであつた。

其處にゐた事務員らしい男に、手短にそのことを話したが、しかも心急ぐ身は、先方がすつかりそれを呑み込んだか否かを確める餘裕もなく、急いで先づ一等室を覗いた。そこにはその姿は見えなかつた。

かの女はすぐ引返した。そしてあせりながら、荷物の置いてある處を抜け、暖いエンジンの火の漲つた機関室を抜けて、そのまゝ、三等室へと行つた。

運わるく三等室は一杯で、人達のいきれがむつとかの女の鼻をついた。一目見わたしたゞけでは、何處に誰がゐるかをはつきりと辨別することが出来なかつた。かの女は愈あせり出した。彼方へ行つたり此方へ行つたりした。

最後に、かの女は漸くその夫婦づれの向うの隅にゐるのを發見した。かの女は遠慮も何もしてゐられなかつた。「少々御免なさいまし。」かう言つて、人と人との間をわけて通つた。

「もし、もし。」

かう最初にかの女は聲をかけた。

ちらと此方を見た夫婦づれ——殊にその女の方の眼に、かの女は逸早く失望の色を認めた。しかし、かうまでしてやつて来たものに、「これは自分のものだ。」とは流石に言へなかつたらしかつた。「さうでしたか。これは貴女のですか。」かう言つて、夫婦づれはその自分の洋傘を返して呉

れた。

それを手にした時——ゴトン、ゴトン、ゴオと言つて、汽船は動き出した。

「大變、大變、私は下りるんですから……。」

かう叫んで見たが、汽船はそんなことは頓着してゐなかつた。

漸く三等室の人込を抜け出して来て、さつき上つたところに來た時には、汽船はもうかなり速い速力を出して、沖へ沖へと航してゐた。

「私下りるんだが……困つた……。」

かう言ふと、

「あ、さうく貴女は下りるんでしたな。さつきの事務員がかの女の顔を見たが、今となつてはもう何うすることも出来なかつた。

「困つたな。」

「何うも出来ないかねえ。」

かう細君は洋傘を抱きながら、泣きさうにして岸の方を見わたした。

「引き返して下さいよ。」

「さア、困つたな……。」

「だつてちやんと斷つてあがつた來たんだもの……。」

「でも、もう仕方がない……。」

「困るねえ。」

ふと思ひついて「Sには寄るんですか、此船は。」

「寄りません。」

「ちや牛堀まで行くんですね。困つたね。」

細君は暫し立つたまゝ、ちつと岸の方を見た。もうかなり來てはゐるけれども、それでもAの河岸とそれに向つて漕いで歸つて行く艘と、亭主や子供のゐる茶屋の茅葺屋根とがはつきりと指さされた。しかし何うすることも出来なかつた。怒つて見たところで仕方がなかつた。

「Sには何うしても寄らないんですか。」

「この汽船は寄らないことになつてゐます。」

「困つたねえ。」

段々船の事務員達が寄つて来て、その話をきいて、後には笑の種にでもするやうにして、「まあ仕方がありませんや、お上さん、牛堀まで行つてそれから引返すさ……。」

「だつて、もう今日は船はないだらう？」

「ことに由ると、最後の牛堀で間に合ふかも知れないが、まあ十に八九は駄目ですな。……三股の少し先ですれ違ふことになつてゐるから……。まあ、一夜牛堀に泊るさ。そしてゆつくり休む方が好い。」

こんな調子で、何うすることも出来なかつた。暫くして再び湖を見渡した時には、Aの河岸も静ももう細君の眼には映らなかつた。夫が「馬鹿な奴だ。」と罵つてゐるのが眼に見えるやうな氣がした。ついで、あの荷物と子供を抱へて、夫はさぞ困つて居るだらうと思つた。あそこか

ら故郷まで二里、その間に俵はない……無論歩かなければならない。「何うするだらう。」かう思ふと、一本の洋傘に心を奪はれた自分が情けないやうに考へられて來た。

今は十に八九は駄目だと言ふ汽船がおくれて間に合へば好いと思つた。無論、夜にはなるが、それでもそこからすぐ引返した方が好いに相違なかつた。

いつまで其處に立つて湖水を眺めてゐても仕方がないので、かの女は兎に角一等室の中に入つて行つた。かの女はそこでそれまでしつかり抱へてゐた自分の洋傘をひろげて見た。別に何處にも變つたところもなかつた。キズもついてゐなかつた。汚れてもゐなかつた。しかし半日他人の手に握られた匂ひは未だに何處かでしてゐるやうな氣がした。かの女は紙を出して、脂切つた柄のところを丹念に拭つた。「何うも仕方がない。かういふ廻り合はせなんだから……。いくら怒られたつて……。こんなことを思ひながら。」

汽船は静かに沖へくと進んだ。今しも沈まうとしてゐる夕日は、まともに船尾を照して、その光線は深く一等室の中にさし込んで來た。船の水を截つた跡は一痕長く金色の輝きの中にくつ

きりと瀬のやうになつて見えた。

それは湖水でも一番深い處であつた。湖は此處では三方にわかれて波濤が凄しく汽船をあほらやうにした。エンジンの一動搖毎に汽船は夫や子供のゐる土地を遠ざかりつゝ、行くのであつた。それがかの女にはさびしかつた。またしても、夫が愚圖々々言ひながら難義して子供と荷物を重荷にして歩いてゐる姿が眼先にちらついた。

ボウといふ汽笛の音がした。向うからの汽船がやつて來たのである。これで最後の希望も絶えた。かの女は何うしても牛堀まで持つて行かれてそこで一夜泊まらなければならなかつた。これも仕方がないとかの女は思つた。やがてすれ違つて行く上りの汽船の白いペンキ塗の姿が、暮れかけた湖の上に遠く離れて駛つて行くのをかの女は眼にした。

## 蠟

## 燭

「何うだ、そこで下りやうか。」

肥つた丸顔をした方の一人が言つた。汽車は闇の中を駛つてゐた。樹かけの百姓家の灯がをりをり車窓を掠めて行つた。

「一體何時だえ？」

相對して腰をかけてゐる一人がかう問ひ返した。二人とも僧侶のかぶる山形の帽子をかぶつて、薄い黒紺の被布を着て、襟のところから金欄の袈裟を見せてゐた。二人とももう四十に近い年輩

であつた。

二人の他に二等室には誰も客がゐなかつた。

肥つた方は被布の下から、小形の金時計の蓋をちよつとあけて見て、「もう十時だよ。」

「もう、さうなるかな。」

一人の方はかう言つて考へて、「十時ぢや、あそこの町に下りて見たつて仕方がないね。旅館屋について、すぐ寝て了ふばかりだからね。何處か上るにしても、すぐ時間になつて了ふし、それに、土地不案内だからあちこちさがすにしても三十分や一時間はかゝるからね。」

「だから、先つきから思つてゐたんだ。あの郡長め、イヤに愚圖々々してゐて、中々要領を得ないんだからな……。たまに、一年に一度か二度しか世の中に出て来ないのだから、旨い酒の一杯も飲めると思つて楽しんで来たんだが、それぢや矢張り駄目かな。昨日はあの通り引廻されるし、今日は今日であの騒ぎ——。ちよつと考へて、「明日は何うしても山へ歸らなけりやならんね。」

「観音院が一人でいそがしがつてゐて、可哀相だからな。」

「こんなことになるなら、奴を寄せば好かつた。」肥つた方はさも失望したやうに忌々しきうに言つた。観音院が出て来る番であつたのを自分で運動して大騒ぎをしてやつて来た愚かさなども繰返された。

二人の頭には騒がしく通つて来て二日間の光景が描れてゐた。管内の寺と寺とが確執して、それに田舎の政治運動が絡つて、黨派が二つにわかれて、本山の度々の調和も何の效もなく一二年経過した。ぢや止むを得ません。訴訟沙汰にするより他に爲方ありません。形勢がかういふ風に段々に切迫して来た。本山では、「何うもそれは爲方がない。調和が出来ないのは遺憾だが、しかし、さういふ風になつて行くなら、これも止むを得ない。」と始めは言つてゐたが、これを表沙汰にしては、本山の威信に關するといふ説と、然るべき位置の調和交渉委員を派遣すれば難かしい話も存外容易く纏るかも知れないといふ説とが段々本山の幹部の間に出て来た。で、この二人は選ばれて其處に遣つて来た。暴風のやうな談判、烈しい凄じい演説、一方を押へれば一方が不平を言ふと言つたやうな恐ろしい争闘、ある村の寺の演説會では、村の若者が一杯に押寄せて示

威運動がましいことをすれば、他の村では、總代が十人も二十人も出て、二人のゐる寺へも押かけて来た。で、二人は到る處で調和演説をしなければならなかつた。嚇したり賺したりなだめたり怒つたりした。その地方の小本山になつてゐる山の上の大きな寺では、管内の重立つた僧侶を集めて、長い長い訓示演説を瘦せた方がした。肥つた方はそこから三里も離れた町に郡長を尋ねて行つたりした。しかしそれも力をつくした効があつて兎に角半分は纏りかけた。年來の感情を打破して雙方互に公平に考へて見ようといふ處まで話は纏つて行つた。最後の宴會には、郡長も警部も村長もやつて来て精進料理の港あけなども出た。酒を飲んで人々は酔つた。「今夜は是非お泊んなさい。」と留めるのを、「まだ、残つた山の用事がありますから、今夜は是非ともその町まで行つてゐなければなりませんから。」かう言つて振切るやうにして二人はそこから發つて来た。

二人は暫し黙つてゐた。

「しかし、勞れた！」

不意に瘦せた方が言つた。

「本當に疲れた！」肥つた方もそれに合せるやうに言つた。「實際ひどかつたね。あんまり饒舌つて聲が嘎れた位だ。三千禮でもやつたやうな氣がする。」大きなあくびを一つして、「これでこのまゝ、歸つて了つては、くたびれ儲けの骨折損だ……。何處かないかな、この近所に……。」

「あるにはあるんだらうが、遅くなつて了つたのが何より困る。」

「不夜城がありさうなもんだ。」

「でもなア……かういふ恰好をしてゐるんだからな。」

まさかさういふ場所に入るわけにも行かないといふ語氣を瘦せた方は洩した。

二人はまた黙つた。汽車は明るい山裾の町の方へ段々近づいて行つた。

「ぢや、何うする？ 矢張奴のところへ行くかね？」

肥つた方が言つた。

「さうしやうぢやないか。今夜は久し振で、奴のところに行つて、昔の話でもして、ゆつくり酒

を飲まうぢやないか。」

「始めて行つてわかるかしら？」

「停車場から三四町しかないッて話だから、ちき分るだらうと思ふがな。」

「びつくりするだらうね。それに、もう遅いから矢張、寝てるかも知れないね。」

「しかし、奴のところなら、寝てたつて、何だつて構ひやしない。……それは構はないがね。……考へて、考へて、

「何うする？ 旅籠屋についてつまらなく寝て了ふよりも、奴のところに行く方が面白いと思ふがね？」

「それは面白いがね……迷惑ぢやないかな。」

「少しの迷惑かけたつて好いさ。好い細君を持つてゐるつて言ふんだもの。」

「綺麗な細君がしら？」

「此間、ちよつと寄つて来た慧観の話では、若い二十三位の細君だつて言ふ話だよ。只者ぢやな

いなんて言つてゐたよ。」

「奴が山を出てから、もう何年になるね。」

「さう？ ……あの入佛式のあつた冬だから……さうさ、……もう四年になるよ。」

「さうかな、もうさうなるかなア、僕達の方は話はちよつとも進まないのに……年月ばかり經つて行つて了うね……考へて、それにしても君の話は何うした？ 好い候補者を東京で周旋する筈ぢやなかつたか？」

「何うも矢張、犠牲者になるやうな形になるからね。矢張長い間の因習だから、山内でも一般に家内を持つツて言ふことは一寸實行し難いね。田川だつて、僕が先驅者になつてやるなんて言つてゐながら、山を出て行く時はあ、いふ始末だからね。睨まれて、山内にゐられなくなつて、こつそり黙つて出て行つたやうな譯だからね。」

「奴なんぞの方が、考へると氣が利いてゐるんだね。山内にゐて、大きな寺に入つて、威張つて忙しい思ひをしてゐるよりも、田舎へ出て、こつそり細君でも持つてゐる方が餘程好いね。」

「しかし、奴も失敗者だからな……。」  
瘦せた方はかう言つて何か考へるやうな顔色をした。かれの眼の前には、これから、たづねて行く舊友のことが歴々と浮んで来た。田川は山内での評判の好男子であつた。淨法院さんといふ名は町の娘の憧憬の的になつてゐた。かれが大師堂にゐると、藝者達が毎日のやうに揃つておくちを引きに來た。五年間も嫁に行かずにかれの跡を追ひまはした料理屋の娘などもゐた。後には山の町の藝者と關係が出来たやうな話であつた。快活で、伶俐で、話しのよくわかる男で、瘦せた方の僧とは殊に仲が好かつた。算の水も氷つた寒い冬の朝に、二人で僧衣の袖を合せて三佛堂に讀經に行つた時分のことなどをも瘦せた方は思ひ出してゐた。  
汽車の速力が緩くなつたと思ふと、町の灯が明るく車窓の兩側に見え出して來た。夏の夜は更けてもまだ更けたらしい様子を見せなかつた。さつき降つた夕立の露は柳の枝に残つてキラ／＼灯に輝いてゐたりした。明るい灯は明るい灯に續いた。何處かで盆踊りの音が賑かにしてゐた。三味線の聞えてゐる明るい室の前のやうなところをも汽車は通つて行つた。

「まだそんなに遅くないぢやないか？」

肥つた方はこんなことを言つて、世の中の歡樂の漲つてゐるやうな明るい町の方を見た。

二人の下りたのは、そこから二つほど行つた小さな停車場であつた。丁度山の裾になつてゐるやうな町で、黒い山派の重り合つた線が闇の中にくつきりと劃つたやうになつて見えた。汽車は二人を下すとそのまま、出て行つて了つた。

若い改札の顔は眠さうに見えてゐた。

二人は停車場の構内を出ると、すぐ俵をさがした。しかし俵は一臺も其處に見當らなかつた。俵がないぢやないか。

瘦せた方は、まだ其處に立つてゐる改札の方に行つて聞いて見た。

「いつも一二臺はあるんですがな。」

改札はこんなことを言つてゐた。



要領を得ないので、止むなく二人は停車場前の店の方へ行つた。「さうですね、いつもあるんですけども、今日はお盆なんですから、皆な休んで了つたと見えますね。」そこに涼み臺をして休んでゐた上さんが言つた。

「成程、盆だ……困つたな。」瘦せた方はかう言つたが、「誰か無いでせうかな、此近所に……。初めて行く所だから、俵がなくなつてはとても行かれないから。」

「さア。」

と言つて、上さんも困つてゐた。「皆な俵屋は町から出張つてゐるもんですから……。」

「町は遠いんですか。」

「遠くもありませんがね……行つても、盆だから誰も出て呉れ、ば好いが——それに、もう遅う御座んすからな。」上さんは和尚さんと見た、けに丁寧に氣の毒さうな顔付をして、「そして何方に入らつしやるんですか。」

「なアに、近いんですけど……。肥つた方はかう言つて闇の中に白く見えてゐる上さんの顔を見

て、浄光寺ッてお寺はこの近所にありますか？」

「浄光寺？ 浄光寺なら、すぐ其處ですよ、いくらもありやしません、晝間なら、此處から見えるんですから……。町に行くよりも近い位ですよ。」

「しかし、困るなア。始めての道で、この間では——二人はこんなことを言つて暫し其處に立盡してゐた。涼しい夜風が田圃の上を渡つて来て二人の衣の裾を吹いた。

今更何うすることも出来なかつた。引返して汽車に乗つて行く譯にも行かなかつた。「兎に角行つて見やうぢやないか。」やがてかう二人は決心した。

「此近所に蠟燭を賣つてゐる家はないでせうか。」

「二三軒先に、駄菓子を賣る家がありますからそこで聞いて御覽なさい。たしかあつたと思ひますから……。」

かう上さんは教へて呉れた。

教へられた店はまだ起きてゐた。庭の軒先には、青く薄を書いた盆提燈の灯がチラ／＼と夜風

に靡いてゐた。「あの提燈を借して呉れると好いがな。」こんなことを言ひながら二人は入つて行つた。

婆さんが出て来て、蠟燭を賣つて呉れた。瘦せた方は「君、マッチを持つてるか。」かう言つて袂から探して出したマッチを受取つてそれに火をつけた。婆さんは不思議さうな顔をして見てゐた。

譯を話して「お婆さん、お氣の毒だが、その提燈を賣つて呉れませんか。」など、肥つた方が笑ひながら言つて見た。婆さんは笑つてゐた。

仕方がないから、裸蠟燭を點したまゝで二人は出かけることにした。山の裾に添つた町の方では、盆踊の音に交つて太鼓の音なども賑やかに聞えてゐた。人々の騒ぐ聲も田圃を越して來た。「まだ町は賑やかなんだね。」

「盆だからね。」

町の見える路の角に立つて二人はこんな話をした。

あとから空車の音がガラ／＼して、提燈を持った男が二人追越して行つた。

裸蠟燭は夜風にチラ／＼と動いた。それを持つた瘦せた方の僧の顔は、青白く闇の中に見えてゐた。町に田舎芝居があると見えて、拍子木の音が高く聞えて來たりした。

夕立の後の路はわるかつた。ところ／＼に水溜などがあつた。バシヤツといふ音がしたと思ふと、「これはたまらん。すつかり水溜の中に落ちちやつた！」かう言ふ肥つた方の聲が後に聞えた。

二人は知らないところに来て、かういふ目に逢ふのを後には笑はずには居られなかつた。「旅に出ると、いろんな目に逢ふね。これなどもあとでは話の種になるね。」など、言ひながら繕ふやうにして歩いて行つた。大きな水溜には星の影が映つてゐた。

酸漿提燈を三つ四つつけた群が賑かに何か話しながら向うからやつて來た。

「あの提燈を一つ何うかしたいもんだね。」

「さうだね。二つ三つつけてゐるから一つ位何うかなりさうなもんだ。」

段々話聲が近くなつて來た。やがてその距離が五六間になつた。向うでも、此方が裸蠟燭をつ

けて歩いてゐるのを見て、不思議さうに話をやめて立留つた。

六つ七つの女の児が三四人、その中に十七八の娘が二三人雜つてゐるのがやがて此方から火影にすかして見えた。丈の高い方の娘は、屋號のついた大きな提燈を持つてゐた。

「姐さん、姐さん。」

かう肥つた方が最初に聲をかけた。「そんなに澤山あるんだから、何れでも好いから、一つ提燈を賣つて呉れませんか。」

娘達は立留つたまゝ、何かコソコソ言つてゐて容易に返事をしなかつた。中にはくすくす笑ふものなどもあつた。

「淨光寺に行くのに、路がくらくつて困つてゐるんだがね。一つ小父さんにその提燈を賣つて呉れませんか。」

瘦せた方がついて言ふと、娘達はくすくすと笑つた。そして矢張返事をせず、二人の傍をすれちがふやうにして通つて行つた。子供達は怪訝な顔をして其處に立つてゐる二人の方を見た。

「戯談ぢやないんだよ、本當なんだよ。」かう言つて聞かせても、娘達は矢張くすくす笑つて行つた。

「矢張駄目だね。」すれ違つてから、瘦せた方はかう言つたが、思ひだしたやうに振返つて「淨光寺には此方へ行つても好いのかね？」かう大きな聲を出して訊いた。

矢張返事をせず、娘達は今度ばた／＼驅け出した。あとから見てゐると、子供の持つた酸漿提燈が大なく輪を描いて搖いて行つたが、その中の一人がころんで、あれと言ふ間に、小さな赤い提燈に火が移つてぼうと燃え出した。わつと泣く子供の聲がした。

もえ上つた提燈の火は、驚いて其處に集つて来る娘達の群をしばらく明るく照してゐた。轉んだ子を慌て、引起したのなども見えた。「お前さんが驅け出すからわるいんだよ。」など、言つてゐる聲も聞えて來た。

「可哀さうに——提燈を一つ燃しちやつた。」

二人はこんなことを言つて笑つた。

町の方へ行く路とわかれて右に入つて行く細い路があつた。一二町行つたら、右に曲つてと致へて呉れた上さんの言葉を二人は思ひ出した。その路は全く田圃路で、畔には草に夜露が一杯たまつてゐた。

「たまらないねえ、これぢや足袋も何も大なしだ。待つて呉れ給へ。肥つた方は先に立つて蠟燭を持つて行く友を呼留めた。

しかし、それは短かい間であつた。その路は更に広い路に二人をつれて行つた。そればかりでなかつた。その広い路の角には、一軒まだ起きてゐる百姓家があつて、幸ひにもそれは浄光寺の檀家の一軒であつた。「さうでしたか、それは大事でした。生憎、今日は盆で、それに町に芝居があるもんだで、仲屋は皆な休んで了つたから……。とつさん、お前、一つ浄光寺まで送つて行つて上げなんし……。親切な上さんはかう言ひながら提灯に火をつけた。

さう大きくない田舎寺がやがて二人の前にあつた。山門——と言ふほどでもない小さな門の奥

に、本堂らしい藁葺の家があつて、その右の方に小さな庫裡の入口が見えた。山内の浄法院と言はれた立派な寺に住んでゐた友達が——男振は好し、話はずいし、學問は出来るし、何一つ缺けたところのないあの才子が、かう言ふ小さな田舎寺にゐるかと思ふと、二人は言合したやうに顔を見合せずには居られなかつた。しかし二人は何も言はなかつた。

先に立つた男が、

「これ、もし、お客さまどうぞよ。」

かう二度も三度も庫裡の入口のところに行つて叫んだ。それでも、早く寝て了つたと見えて、容易に誰も起きて来るやうな様子もなかつた。男は後では戸を叩いた。

やがて小僧らしい十五六の少年が眠むさうな眼をして戸を明けたが、刺を通ずると、その取扱ひが俄かに生々とした趣を見せて來た。奥で人の起きる氣勢などもした。

「何うぞ此方へ！」

二人は奥の十疊の間に通された。小僧が前の雨戸をガラ／＼と開けて、臺ランプの明るいのを

其處に持つて來たりした。蚊いぶしを持つて來て、「此處は蚊がえらう御座いますから。」など、言つた。

涼しい夜風は流る、やうに裏の森から入つて來た。床の間には古い具足などが飾り立てられてあつた。達磨の幅物は薄暗くその向うに見えてゐた。二人は被布をぬいで、座蒲團の上に坐つた。「えらい目に逢つたね。」

こんなことを言つて笑つた。

「やア。」

かう言つて奥の襖をあけて昔の友達が入つて來た。二人はいくらか瘦せて青白い顔をした友達を見た。寢巻にへこ帯をくるく／＼巻いてゐた。

「めづらしいね。本當に吃驚したよ。」主僧はかう言つて、「今時分たづねて來やうとは思はないからね。山の人？ 誰れだらう山の人？」つて一寸分らなかつたよ。しかし、よく來て呉れた。光明院さんも一緒とは本當にめづらしい。夢のやうな氣がするよ。」

元氣ななつかしい昔の調子は二人の心を和けるに十分であつた。「さう／＼慧観さんがたづねて呉れた。……かういふところになると、山のことがこひしいよ。一日だつて思ひ出さないことがないからね……。慧観さんが來て呉れた時にも本當にうれしかつた。あんな風にして出て來たんだから、殊に、山がなつかしくて仕方がない。さうかえ？ あそこへ山の用事で來たのかえ？ 本當によく來て呉れた。ナアに、遅くだつて構ひやしないよ。いつでも十一時半まで起きてゐるんだけど、今日は客が來て、少し酒を飲んだもんだから、早く寢て了つたんだ……。さうか、俵がなくて、それは困つたらうね。……成ほど盆だからね、田舎は——。」

こんな風にして話した、一緒に加行をした時分のなつかしい調子が矢張何處かに残つてゐるのを瘦せた方は見た。「まア、落附きたまへ、話も澤山たまつてゐる。何から話して好いかわからない。」かう言つて奥の方へ出たり入つたりした。

暫くしてから、細君が茶を運んで來た。丈の小づくりな、何方かと言へば瘦せた方の人であつた。かねて聞いたほど美しい人でもないのを二人は見た。

山の和尚さん達だと言ふので、細君は何處かきまりのわるさうな物の言ひ方をした。唯物ではないなど、言つた慧観の言葉が惹起した好奇心はもうすつかり二人にはなくなつて了つてゐた。「よく、入らして下さいました。こんなところですから、何にもお構ひ出来ませんでな。」かう言つて茶を侷める言葉にも何處か田舎の訛が交つてゐた。

しかし家庭といふことが山の和尚さん達にはめづらしかつた。美しくあらうが無からうが、さういふ異性の人がゐて、やさしい口の利き方をして、主人と一緒に客を欺待すといふ状態は二人の心を惹かずには置かなかつた。二人きりになつた時、

「そんなに別品ぢやないぢやないか。」

「でも、あ、して一家をつくつてゐるのは好いね。僕等だと、客が來ても、小僧が汚い衣を着て茶を持つて出るといふ形なんだがね。矢張女がなくなつては駄目だよ。」

「それはさうだね。早く實行するんだね。」  
肥つた方は笑ひながら言つた。

主僧はやがて入つて來た。「いや、もう、お耻しいわけサ。」など、頭を掻いて「なアに、さういふ意氣な話はないんですよ。」

山を出て、放浪して、あちらこちらと迷つてゐる間に、不圖、昔の知己が此處にゐたのを頼つて、何の氣なしにやつて來て見ると、丁度、此寺が無住で長い間空いてゐたので、一つお前が坐つて呉れないかと言ふやうなわけで、そんなら一時此處に坐ることになつた。入る時には、こんなことになる少しも思つてゐなかつたけれども……つい、居心が好いつて言ふんだか何だか、あんなものまで出來て了つたといふわけですよ。そんなことを慧観さんが言ひましたか……：……何うして、それどころぢやないんですよ。英雄の末路つて言ふやうな有様なんですよ。お前さんも一人きまつたのを持つ方が好からう、もう持つても好い年だなんて言ふやうな譯で、世話人が寄つてたかつて押つけて呉れた始末なんですよ。」

寺の細君には、此處に嫁に來て、まだいくらも日數が立つてゐないといふ柔らかな氣分が残つてゐた。「お照お照」と主僧が呼ぶと、ハイ〜とやさしく素直に返事をして、莞爾した愛嬌を四

邊に見せた。さうかえ？ それぢやさうした方が好いだらう。主僧はかういふ風なやさしい口の利方をした。

「もう夜も遅いんだから、何も構つて呉れ給ふな。かう言ふのもきかずに、主僧は小僧と寺男とを町の方に走らせた。先づ何より酒と言ふので、細君はちよつとした浸し物を菜に膳を客の前へと運んで来た。三人とも山内で聞えた酒豪で、何はなくとも酒さへあればといふ夥伴であつた。「それぢや、久し振り一杯飲むかな。かう言つて肥つた方が先づ杯を取上げた。細君は傍に寄つて酌をした。丸髭の手絡が赤く見えてゐた。

「矢張、酌は異性に限らね。」

など、瘦せた方が笑つた。

町に行つた使ひが、寝た肴屋を叩き起して、何うやら彼うやら刺身に鹽焼位を持つて来る時分には細君の手づくりの吸物も出来た。奥では話がはづんで、賑やかな笑聲が絶えず其處から洩れて来た。細君は櫻嬢好きうにして、さうに酒を飲んでゐる夫の顔を見た。

山内といふ二字には細君の耳にはかなりよく熟して入つてゐた。山にゐる時分には、かう言つて夫はよくその時分の話をした。参詣人が一年中に何十萬人あるといふ話や、宮様や貴夫人方が絶えず避暑にやつて来るといふ話などは細君の耳には親しかつた。夫がある宮様のお氣に入りであつたといふ話なども聞いた。お山にゐれば、こんな物のわからない百姓を相手にしなくつても好いんだ。など、も夫は言つた。

奥の座敷は賑やであつた。盃はそれからそれへと廻つて行つた。好いさ、明日一日位おくれたつて好いぢやないか。一日保養して、何處かへ行つて面白い思ひをして歸るさ。僕なんざ山にゐる時分は、そんなことは平氣だつたがな。など、主僧は言つた。山内の老僧達の話も段々出て行つた。

「今、僕等が他に先つて、實行すれば、わけはないんだけれども……何も苦情の起りやうがないんだけれど、それにや少し立派にしなけりやなア。今の寺の普請がすつかり出来てゐるれば何うにもなるんだけれど……君が先驅者になると好いんだけれど。」

「瘦せた方が肥つた方に言ふと、

「僕はまだ駄目だ、位置がわるいからな。」

と肥つた方が言つた。

「しかし、本當につまらんよ、本坊にねとまりして、冷い蒲團の中に一人でもぐつて寝なけりやならないと思ふと、冬などは殊にイヤになつて了ふよ……お經などいくら讀んだつて仕方がありやしない。……僕も、いつそ、君のあとを追はうと思ふことがよくあるよ。」

「だつて御覽の通りの田舎住ひぢや仕方がないぢやないか。」

「これでも好い。今の生活よりも好い。……兎に角、家庭が羨ましい。奥さんがあるつていふことが羨ましい。」

「つまらないよ、君、持つて見ると……君方の想像したやうなものではないよ。」

「それはさうかも知らない。しかし、僕等にはまたそのつまらない味がわからないんだから、可哀相なもんぢやないか……」瘦せた方はかう言つて、「人間と生れた甲斐がないぢやないか。もう

來年は四十たせ、僧侶にならうといふ本心で僧侶になつたんなら、あきらめもつくけれど、子供の時分から嫌應なしに僧侶にされたんだからね。かういふことになるのは仕方がないよ。山内だつて、年寄達はそれは知らないが、僕達の年輩のもの、後には皆なさういふ要求があるんだ。君なんかの方が餘程賢いよ。」

「本當だ！」

かう合せた肥つた方はもうかなり酔つてゐた。

「つまらん！ それよりも少し唄でも唄はうぢやないか。え？ 田川君！」

かうつゞけて言つた。

「まア、飲み給へ。」

主僧はかう言つて徳利を取つた。

「しかし、君がかういふ風にならうとは思はなかつたね。田川君、田川つて言ふ名は今でも山内でひいたものだけ……この間、瓢亭で會があつた時、あの小さな、あの時分お酌をしてた、



何とか言つた妓がゐたね。そら、君が可愛い子だつて言つた奴さ。あれがね、僕のそばに来て、田川さん何うしたでせうつて言ふから、好い奥さんが出来たつて話をしてきかせたら、まア、さう、男ツて浮氣なものね、小萬さんが聞いたら何んなでせうツて言つてゐたぜ。小萬は何うしたえ？」

「あれつきりだよ、何うしたかちつとも知らない。」

「内々逢つてゐるんぢやないか。」

かう肥つた方が言ふと、

「そんなことはない。」

「本當かえ？」

「それは本當とも……。」

酔はもうかなり一座に廻つてゐた。肥つた方は、「此間も君の噂が出てゐたよ、本當にあんな綺麗な和尚さんはもうありやしないツて、皆なして言つてゐたよ……。君がゐなくなつてから一層

皆なが何の彼のと云つてゐるよ。何うも、吾々が見ては、さう大して好い男とも思はれないんだけども……矢張、女には何處か好い處があるのかな。」

「まア昔の話はよさう。それよりも唄でも唄はうぢやないか。」

主僧はかう言つて、其時分覺えた端唄物などをうたひ出した。二三杯ぐつと飲んだ酒に酔が急に出て來たらしく見えた。肥つた方もそれにまけずに流行唄などを唄ひ出した。細君が銚子の代りを持つて行つた時には、その肥つた方が義太夫のさわりか何かを眞面目な顔して唄つてゐた。瘦せた方は顔を眞赤にして、時々口の中でそれに合せて矢張小聲で唄つてゐた。

「矢張、絲がないと駄目だな。」

瘦せた方から言ふと、

「あるよ、出さうか。」

主僧は向うに立つて行かうとする細君を呼びとめて、「おい、これを持つて來ないか。」と言つて三味線を弾く眞似をした。細君は笑つて向うに行つた。

やがて細君は三味線と撥とを持って来て其處に置いた。主僧はそれを手に取つたが、「それ？何か唄ひたまへ。」かう言つて調子を合せて、「先づお座附を一つやるかな。」

……君に逢ふ夜は……三味線と唄とが流るやうにあたりに聞えた。

「いつ習つたんだえ？ 豪いもんだな。」二人は眼を睨らすには居られなかつた。

「本當に何時習つたんだえ？」

「何アに！」主僧は笑つて。「昔からこの位の隠藝はあるさ！ 面白いだらう。それよりも此處に入る時の條件が面白いぢやないか。外に何も望みがないが、三味線を弾くことだけは許して呉れつて言つて、世話人の承諾を得て入つたんだ。……妻か？ 妻も少しは弾くさ。妻を世話するといふ時にも、これだけは弾ける奴ツて頼んだんだからね。おい、お照、お照、お前も、此處に来て、何か一つ弾いて上げないか。」

## 萎れた草

「何處か散歩して見ないか。」

「散歩——僕は湯にでも入つて寝やうと思つてゐるんだ。」かう親友の原は眉を寄せた。

「好いちやないか。芝居にでも行つて見ようぢやないか。」

「行く氣はないね。今朝から頭痛がして困つてゐるんだもの。」

「爲方がないので、宗彦は「朝子さん、何してゐるの？」

「昨夕から、ライオンを描くなんて大騒をしてゐるたつけ。まだ、一生懸命で描いてゐるだらう。」

見てやつて呉れ給へ。」

宗彦は起つて、玄關に接した朝子の居間に入つて行つた。机の周圍には、紙や、繪具や、書籍が一杯散ばされてあつたが、宗彦の入つて來るのを見ると、朝子はいきなり机の上を袂で隠して了つた。白いエプロンは子供のやうに赤や青や黄の繪具で汚されてゐる。そのかくされた袖の下を強いて窺ふやうな氣勢を宗彦が示すと、朝子は更に袖の上に顔を埋めて了つた。宗彦は凝とそ  
の突伏した姿を眺めた。

驚くほど長い間じつとしてゐてから、朝子は、

「あつちへ行つて下さい。」

と言つて顔を擡けて笑つた。

明礬を引いた紙の上に、ライオンはかなり大きく手際よく描かれてあつた。繪の具は既にところどころ塗られてあつた。朝子はもう見られて了つたから爲方がないといふやうにして、繪具筆を取上げて、ライオンの踏んでゐる地面のところをちよいちよいと無造作に塗り始めた。

「今日は、宗彦さん、屹度入らつしやると思つてゐてよ。」

「何うして？」

「今日はお天氣が好いでせう。かう言ふお天氣に、貴方は家にじつとしてゐられない性分ですもの！」

實際かれは天氣の好いのにじつとしてゐられずに出て來たのであつた。朝、床の中で眼が覺めた時、いつもと違つて非常に氣分が好いので、それで今日は天氣の好いといふことが知れた。起きて縁側に出て見た。果して空は青かつた。朝日は庭樹を斜に紅く照らして、鳥が頻りに心持好ささうに鳴き交はしてゐた。かれは何處に行かうかと思つた。淺草の雑踏する群集の中に行つていかにも人生を樂んでゐるやうな人達の顔でも眺めて來やうか。それとも自分の唯一の女の友達を訪れて、久し振であの莞爾したやさしい顔を見て來やうか。しかしそれも大變だ、出て歩くと、いくら氣分が好いと言つても、矢張、疲れるにきまつてゐる。それよりも、靜かに落附いて家に寢てゐる方が好いかしら？ など、思つた。その女の友達と言ふのは、他でもない、親友の原の

妹の朝子で、その快活な、血色の好い顔や、小さな紅い唇や、無造作に取繕はない髪や、生々とした眼色や、さうしたものが常に宗彦の眼の前にチラ／＼した。砂糖のやうな甘い聲で、人を嘲弄するやうに少し唇を突出したりするその表情もかれは決して憎いとは思はなかつた。病める宗彦に取つては、殊に、此頃、さうした若い女の聲を聞くことが必要であつた。さうした若い女の聲や笑ひや表情は、熱した顔を冷めたい水で冷されるやうな快感をかれに與へた。で、今日も遂に、朝子を見るために出かけて來たのであつた。

宗彦は室内をあちこちと眺め廻したが、小聲で私語くやうに朝子に言つた。

「芝居へ行つて見ませんか。」

「さうね——。」

始めは行つても好いといふ風に首を傾けて見せたが、突然、

「よませう。」

「……………」

宗彦はグツと小さな怒を胸に覺えた。かれはかうした蒼ない拒絶を豫想してはるなかつたのであつた。

「行かない？」

「え。」朝子はかう言つたまゝで、無頓着に頻りに繪具を紙に塗つた。

秋晴の町を此ま、家に歸らうか。それとも何處かへ行つて見やうか。こんなことを思ひながら、宗彦はひとり静かに歩いた。

自分の誘ひには誰も應じて呉れない。もう自分は誰にも相手にされない。かう思ふと、天地の間に見捨てられたといふやうな誇張した淋しさが轟々とかれの魂を取巻くやうに襲つて來た。女の鋭い天性で、朝子は黙した自分の戀を知つてゐるのに違ひない。知つてゐて、そしてあゝした蒼ない態度に出たに違ひない。それと言ふのも皆なこの身が病んでゐるためである。不治の病に罹つてゐるためである。それはかの女を見る自分の眼、または自分を見るかの女の眼ではつきり

わかつてゐる。

かれはしかしすぐさうした思ひを捨て、了つた。あんな女が何んだ。あんな女は自分の戀に値ひしなれと思つた。かれは病氣になつてから愈り易くなつたことを思つた。そしてその愈が病人によく見る執拗な毒々しいものであることを思つた。かれの考はまた朝子の方へ戻つて行つた。(俺は話は下手だ！ 殊に朝子の前では一層さうである。よく吃る。よく顔をあからめる。しかし、吃つたり、體裁の好い口がきけなかつたりするのは、それだけこの唇が汚れたことを言はずこの眼が世間の汚れたいろ／＼なものを見ないからであつて、自分に取つてはそれが却つて、淨い口、無垢な眼であるといふ誇になる。旨く言へば、朝子だつて、内所で一緒に芝居に行く位は何でもないんだ。であるのに、躊躇した。何故だ？) その何故？ に宗彦は又突當つた。屈辱と言つて好いか、女の冷淡を罵る心と言つて好いかわからないやうなもの、ために焦々した。裏切られたやうにも、また人の心の頼み難いやうにも思はれた。

宗彦は胸部に少し疼痛を覺えて、軽く咳をした。それが二三遍繰り返した。汗が額に滲んで來た。

紙に受けた痰には細い眞赤な線が入つてゐた。しかしそんなことには馴れ切つてゐるもの、やうに、無感覺な眼をして、暮秋の明るい光線の中にかれはそれを眺めた。

やがてかれは玉川の景色を見に行くことにきめた。で、電車に乗つた。また女のことを思ひ出されて來た。もう朝子の家には行くまい。自分の戀した朝子は死んだことにしやう。そして戀に破れた自分の果敢なさを味つて見ることにしやうと思つた。ふと見ると、車内には女が二人乗つてゐた。かれはちよい／＼その方に眼をやつた。神の創造物の中では、何と言つても、女が一番美しく完全なものだと思ひながら、楽しむやうにして、かれはそれを眺めた。不幸にして、その女の美貌はその聲の音楽を持つてゐなかつた。(これで、もう少し、好い聲の持主であつたなら、何んなに好いだらう。) など、かれは思つた。朝子がまた思ひ出されて來た。で、いよくかれは失戀したことにきめたが、それにしても、その失戀をこの二人の女の前にさらけ出して話したなら、二人は何と言ふであらうかと思つて見た。笑ふだらうか、それとも憐むだらうか。こんなことを考へてゐる中に、かれの眼には、衰へたかれ自身が映つて見えた。何の情熱もなくなつた眼

と、溝のやうに皺の立つた額と、血の氣のすつかり失せ果てた唇と、ぼんやりして一とところをじつと見詰めてゐる姿とを持つたかれが――。

切符に乗換の鉄を入れに來た車掌に、かれは年寄のやうに低い喪心した聲で、「澁谷！」と答へた。氣が附くと、二人の女は何處かで下りたと見えて、そのあとには、請負師のやうな男と土工らしい股引をはいた男とが乗つてゐた。

かれは依然として大きな悲しみの下にあつた。大勢の人達の中にも、かれは全く孤獨であつた。電車の終點から玉川電車まで行く間をすら、かれはとぼとぼと足を引摺るやうにした。

玉川電車の方では、風が少し出た。何處からともなく冷めたい風が車内に吹込んで來た。それを宗彦は非常に嫌つて、いつそ家に戻らうかしらと何遍も／＼思つた。それに、電車の動搖も市内の電車と比べて夥しかつた。今にも座席から揺り落されはしないかと思はれるほどである。坂の上に来ると、行手に白い富士が見えた。

宗彦には、玉川は初めて、あつた。電車だけの狭いレイル路が阪になつて勾配が急になると、

前にはひろ／＼した眺めがあらはれ出して來た。天高く、地潤しといふ感じが狭々と胸に上つた。やがて、電車を下りて、路でないやうな小さな飲食店の前を真直に向うに行くと、もう其處は河原で、石のごろ／＼した間に、綺麗な水が透き通るやうに日の光線を織り込んで流れてゐた。飲食店の前の畑には、霜にしほれた黄菊が叢を成して澤山にかたまつて咲いてゐる。宗彦はひろびろした川原を少し歩いて見たが、すぐ疲れて、そのまゝ、水の流れる端に、風を避けるやうにして休んだ。

川原では、砂利を選つてゐる人足達が大聲に饒舌つたり怒鳴つたりしてゐるのがさびしくあたり響きわたつてきこえた。宗彦はじつと水を眺めた。秋の碧い清い水は日を帯びてキラ／＼と美しく光つて流れた。

暫しはのんきにそれを眺めてゐたが、あまり暖かなので、かれは羽織を脱いだ。顔がのぼせて頬があつく、胸がわるくなつて來た。熱が出て來たのであつた。かれは歸らうと思つて靜かに起上つた。

再びもとの處に来て、電車に乗つた。空には灰色に濁つた雲が出て、あたりは何となく陰氣になつた。かれは飽満したやうな不快を絶えず胸に覺えて、堪らないほど手足を靜かに延ばしたくなつたが、しかもかれを乗せた電車は相變らず激しく動揺した。否、そればかりではなかつた。單線のために、ある停留場では、長い間もどかしく電車を待ち合はせなければならなかつた。あまりに焦れつたさに、かれは下駄で床を踏み鳴らしたりした。

ふとある光景がかれの眼に映つた。

山茶花の白く赤く咲いてゐる垣があつた。そこから尾の長い一疋の可愛い小犬が出て來た。始めはぼんやりして遠い地平線の上を見てゐたが、ふと、その鼻の先に、黃い羽蟲があらはれ出した。小犬は匂ひをかきながら、激しくその羽蟲を追ひ廻した。羽蟲は低く／＼飛んで行つたが、やがて急に、高い／＼空の方へ舞ひ上つて行つた。小犬は急に吠えた。さながら羽蟲の急に見えなくなつたのに腹を立てたといふやうに――。それが宗彦には、言ふに言はれない無邪氣さを感じさせた。小犬は猶二三度吠えたが、それで満足したかのやうに、やがて尾を下けて、再びもと

の垣の中に入つて行つた。此處ですれ違ふ筈の電車の遠い唸りがやがてきこえて來た。

家に歸つて來たかれは、十里の道でも歩いたやうに疲れてゐた。腹が空いてゐないやうな氣も一方ではしたが、しかも夕飯はかなりに旨く食へた。唯冷めた焼魚がいくらか胸に觸つたやうな氣がした。暫し經つてから、かれは湯に出かけた。

湯屋の浴槽からは、高い硝子窓を透して、碧い空の一部が見られた。かれは湯に浸りながらいつもそれを眺めた。しかし、その日は生憎曇つてゐた。

郡部に近い湯屋の午後は、日曜でも客は少く、大きな水槽に滴たり落ちる水の音は、がらんとした浴場に高くさびしく規則立つて響いた。宗彦は病氣にも拘らず、熱い湯に自分の肉が溶けて行くと思はれるほどそれほど長く入つてゐることが好きだつた。かれは長い間靜かにじつとして浸つてゐた。

湯から上ると、汗が止度もなく流れた。かれはそのまゝ、びたりと洗場に坐つて了つた。脈搏が

自分にもきこえるやうに高く／＼躍つた。ガラリと膝の上に置いた手には、青い血管が際立つて太く蜚蛇のやうに走つてゐるのが眼についた。ふと痰が咽喉に支へたやうな気がしたので、洗場の細い溝のところへとかれはやつて来て、つゞけて二つ三つ咳をした。と、いつもの痰とは違つて、水のやうなものが咽喉の奥から舌の上へと流れて来るのを感じた。吐き出すと、それは赤い血であつた。

かれはギョツとした。

しかし何うすることも出来なかつた。かれはそのまゝ、板の間に腰を据ゑ、胸を押へて、出来るだけ落附かうと試みた。成るだけあたりの浴客に見せまいとした。しかし血はあとからあとへと出て来た。口から出さぬやうにしても、鼻孔の方へ廻つて、そこからタラ／＼とかれの胸の上に滴つて落ちた。かれは暫しそこに躊躇んだ。

かれの心はしかし冷静であつた。外科醫のやうに冷静であつた。かれは口や胸の血を綺麗に拭ひ、それが終ると、靜かに着物の脱いであるところへやつて来た。體からは、汗がまだ流れてや

まなかつたけれども、それを拭ふだけの動作でも、咯血を誘ひはせぬかと危まれたので、そのまゝ濡れた身體に着物を着せて、湯屋から出て来た。

「たうとう出たな。」

かう思つたが、それと同時に、さびしい笑ひがかれの口の邊に漂つた。かれは冷めたい鐵か何かにでも觸つたやうな気がした。やがて口の中に腥いものが一杯にたまつて来た。それをかれは辛うじて家まで押へに押へて戻つて来た。

格子戸を明けて上り端に来るや否、そこにあつた新聞紙の中にそれを吐いた。激しく咳が出て来た。(もう家だ。氣象はいらない)かう思ふと、毒々しい血が咳と共に一杯に出て、あとには黒い血の塊のやうなものが續いた。窒息するばかりの苦しさが總身を震はせた。

かれは上り端の三疊に仰向けになつた。

「枕！ 枕！」

かうかれは叫んだ。



奥から母親が慌て、出て来た。冷めた焼魚のために胸をわるくしてもどしでもしたのかと母親は思った。その前に、かれはすべて鮮かな生々しい血を新聞紙にかくした。

「胸をわるくしたのかえ？」

母親はかう訊ねた。

宗彦は何かそれに答へやうとしたが、腥い液体がまた舌の上に流れて来たので、唯黙して點頭して見せた。枕を頭の下にあてがうて貰つてから、そつと血を口から新聞紙に移して、

「氣持がわるくなつた、急に！」

「もどしでもしたのかね。」

かう母親は心配さうに訊ねた。

「少し。」

「焼魚がわるかつたんだらうね。先生に来て貰はうかね。」

「もう大丈夫です。足が冷えるから、足袋を穿かせて下さい。」

母親の觸つたかれの足は、死人のやうに冷めたかつた。それに、曇つた日の光線の悪い室内に、顔も蒼白く、額の長い髪が生え際に汗を光らせて寝てゐる姿は、唯事でないやうに母親に思はせるに十分であつた。

「先生を呼んで来やう！」

かう言つて母親は起上つた。

「まア、そつとして置いて下さい。先生を呼ぶよりも何よりも、ソツとして、容態なんかきかないで置いて下さい。」

かう宗彦は言つて、新聞紙も、塵箱に捨てすにすぐ前の溝川に流して下さいと頼んだ。母に咯血を見せたところで爲方がないと思つて、「中は見ない方が好う御座いますね。」と附加へて言つた。

母親は新聞紙の丸めた包を持つて立つて向うに行つた。宗彦に取つては、咯血の量の夥しかつたことが、しかもそれが黒い塊であつたことが、妙なからず意外に感じられたが、しかも、す

ぐ醫師に来て診て貰はうとは思はなかつた。醫師も、これを何うすることも出来ないのをかれは豫めよく知つてゐた。

幸ひに家の内はしんとしてゐた。かれは靜かに仰臥した。

かれは一時目をつぶつたが、再び明いた時には、曇つた日の軟かな光線が臺所についた女中部屋に流れるやうにさし込んで來てゐて、その柱にかけてある肴屋の通帳がさながら浮き出するやうに際立つてはつきりと見られた。と、毎日やつて來る肴屋の姿がはつきりそこに浮んで來た。それは二十五六のいなせな男で、眉毛の薄いのを氣にして、いつも墨で黒く塗つてゐるが、時には地まで眞黒にしてゐるのを見ることも少くなかつた。腹掛の井の中には、いつも小さな鏡が入つてゐて、人のゐない所でそれを出して、顔を映して見たりした。宗彦は肴屋の通帳に目を留めてから、心の中に、"Death stares me in the face" など、繰返した。と、死の冷めたい呼吸がそのまゝ、顔にかゝつて來るやうに氣がした。自分は最早此世にゐなくなつても、肴屋は矢張りやつて來るだらう。今日は！と怒鳴つてやつて來るだらう。そして奥から人の來ない間、鏡を出

して引眉毛の自分の顔を映して見るだらう。その柱にかけられてある通帳も、いつものやうに母親と肴屋の手を往つたり來たりするであらう。かう思ふと、肴屋のぼての中の荷をあれかこれかと見廻しながら、安くつて旨い總菜の肴を母親が選んでゐるさまが歴々と眼の前に浮んで見えた。と、自分の身體はたわいもなくふわふわと空中に浮動して行くやうな氣がした。心もそれと共に輕くなつて行つた。睡眠がひとり手にかれにやつて來た。

再びかれが眼を開いた時には、肴屋の通帳は、夕暮近い灰色の光線の中に半ば埋められたやうになつてゐた。かれは非常に長い間寢たやうな氣がした。再びこの肴屋の通帳を見たといふことが、何だか二度と見られぬものでも見たやうな喜びをかれに誘つた。自分はまだ生きてゐるのである。的確に生きてゐるのである。かれは靜かに自分の脈を數へて見た。六十一しかない——そんなわけはないと思つて、もう一度やつて見たが、矢張り同じであつた。それに、さつきとはちがつて、頭もはつきりして、健康の折と少しも違はないやうな氣がした。

體にもまだ十分力が残つてゐて、眠むる前のさつきのあの咯血は、遠く過ぎ去つた悪夢か何ぞ

のやうに思はれた。何をさし置いても、頭が晴々としてゐるのが心丈夫であつた。

「何うだえ？ 心持は——」かれの起き出して行つたのを見て、母親はかう訊ねた。

「大變好い……。」

「さつきつあの足の冷めたかつたこと！ 私は吃驚した。餘り熱い湯に入つてのぼせたんぢやないか。」

「さうでせう、屹度……。もうよくなつた。思つたより早く治つた……。」

「今日は先生に診て貰ふ日だね。」

「さうです。ちよつと見て貰つて來ませう。」

歩いて見ると、流石に酔つたものゝやうに體がよろ／＼した。咳は成るだけ腹に響かないやうに、やうにと心がけたが、痰は矢張眞赤で、氣分の好いのも當てにならないやうな氣がした。

「醫者はすぐ近所であつた。如何ですか？」かう莞爾してかれの顔を見た。

成るだけ内輪に、咯血の話をかれはした。醫師は「フム、フム」と言つて聞いてゐるが、しか

も別段それに重きを置いてゐるやうな様子も見えなかつた。

脈を見ながら、「食事はいけますか。」

「食慾はありません。」

「フム。」

醫者はかれの咽喉を調べてから、肌をぬがせて、胸と背とに聴診器を當て、見て、さて指の尖でコツ／＼と叩き始めた。空虚から發して來るやうな音、餘韻の短かい音、雜駁の濁つた音などが、一しきりしんとした靜かな診察室に際立つてきこえた。醫者は背中の方を叩き終ると、思ひ當つたことでもあるやうに「フム」と言つて自から點頭いて見せた。宗彦はしかし別に何事をも聞かうとはしなかつた。醫者はかうやつてすつかり飲み込めたやうな顔をして見せるけれど、果して何れだけ本當にわかかつてゐるのであらうか。かれは今までに既に餘りに多く醫師の治療に信頼し、且つ失望して來た。

「成るだけ靜かにしてゐなければいけませんな。」

「矢張、咯血したのは、餘り動いた故でせうか。」

「さうですな。」

「今日玉川の方へ遊びに行つたりなんかしたものですから。」

「歩くのは、餘り好くはありませんよ。ちつとしてゐなければいけません。澤山血の出るやうなことがあつては大變です。それでは、今日は藥を替へて差上げませう。」

長く藥を飲んでゐると、藥の替るのは嬉しいやうでもあり、また厭なやうなものでもあつた。苦い藥でも、親しみを持つて馴れて來ると、段々好いところが出來て來た。かれは藥局の窓から出された藥瓶を不安さうに眺めた。それは少し紅味を帯びてゐた。

その夜はかれは穩かに眠ることが出來た。晝間もあゝして寢たに拘らず、床に就くと、すぐぐつぐつと熟睡した。朝起きた時も、昨夜寢たまゝの仰臥の姿勢であつた。氣分も好かつた。唯、腰から下が非常に冷えた。

眼がさめると共に、今日は會社へ出たものか、何うかといふ考が逸早くかれの胸に上つて來た。

かれは自分の生命のもう數へられてあるのを思つた。そして、その數へられてあるといふことに悲傷せずに、靜かに、男らしく、その日の近い來るのを待たなければならぬと決心した。最後の力まで、働いて、そして靜然として死に面するほどそれほど悲壯なことはあるまい。かれはかう考へて會社に出勤することにした。

朝風はもう寒かつた。かれは震へながら電車を待つた。電車は來るには來ても、どれもこれも満員で、大抵は停車せずに素通りをした。丈夫な時なら、飛び乗りでも何でも出來るのだが、今はそんな勇氣はなかつた。漸くちよつと留つた電車に乗るには乗つたが、あとからあとからドシドシ人が乗込んで來て、押倒されないためには、かれは死力を盡して入口の扉の上部につかまらなければならなかつた。かれの眼は擴大し、かれの鼻孔はおのゝいた。しかし、かうした忙しい朝毎の雜鬧も、ちき自分には見られなくなるのかと思つた。

平生無口なかれは、會社に行つても、碌々同僚と口をきかなかつた。かれは唯黙つて仕事をし

た。仕事は馴れ切つてゐるので、別に面倒なこともなく、體を疲らせるやうな憂ひもなかつた。しかし、昨夜の咯血以來、何となく胸に大きな空洞が出来たやうな氣がして、何ぞと言ふと、そこからまたあの恐ろしく黒い血の塊が出て來はしないかと危まれた。咳をするにも氣が置けた。晝飯がすむと、いつもの如く、人々はてんでに煙草盆を引寄せて、煙草をふかしながら雑談を始めた。話はいつも變らず、人間の運不運や幸不幸や榮枯盛衰で持切られた。中でも、來年の高等文官の試験の準備をしてゐる大野といふ男の話した「無教育で、無一物で、ぶらりと東京に出て來て、二三年で巨萬の富をつくつた好運の男」の話が人々の心を惹いた。

「何うしてさう旨く行くんでせう。」かう大野は言つた。

「矢張、あゝいふ人は豪いからですよ。」宗彦はかう傍から口を出した。

「豪い、何が豪いもんです。俸の戀人を自分の妾にしたり何かして、丸で獸のやうな奴ですもの。」

「しかし、金を拵へたところは豪いぢやありませんか。」

「併し、金を拵へただけでは、人間として、豪いといふ理由にはなりませんまい。」大野は煙草の煙を吐いた。

「いや、理由になりますとも……。金をためて、そして長命するといふことは、人間として一番偉いことです。」

「そんなことはないでせう。長命も人間としては豪い條件になりますまい。」

「なりますとも——。」宗彦は思はずかう聲を立てた。「東京のやうな生活の激しい處では、單に食ふ、單に生きるといふだけで、それで大變な問題です。君や僕のやうに、自分の肉を削るやうにして、それに由つて生活する者に取つては、長命は甚だ覺束ないこと、は思ひませんか。偉くなければ出來ないこと、は思ひませんか。私はいつも思ふ、天壽を全うするといふことは、生物として最も偉大なることで、東京見たいなところで、五十年以上生きた人は、何んな人間も本當に偉い人間だと私は思ふ。」

これだけ饒舌るにも宗彦は咽喉のイラ／＼するのを覺えた。

大野は面倒臭いと思つたらしく、「それもさうだね。」など、言つて、すぐ話を他へ外して了つた。

宗彦は平生餘り餘計な口をきかないだけに、議論などをやると、いつも自分から先づ激した。今もあれだけのことで、何か大事件にでも打突りでもしたかのやうに夥しく胸が躍つた。しかし、一方には、自分ながら旨いことを言つたものだと思つた。

午後になると、頻りに寒氣がして、熱が出て來た。しかし、氣分は別にわるくはなかつたので、時間までゐて、そしていつものやうに歸途に就いた。

われながら體の衰へたのを感じずには宗彦はゐられなかつた。會社から電車の停留場まで僅かに一二町、それにすらかれは疲勞を覺えて、電車の踏段を上るにも、老人のやうに膝を手に置いて、そして辛うじて上つた。閉つてゐる入口の扉を明けるのも容易でないほどかれは弱かつた。かれは疾病のいかに迅速に體力を消耗させるかに喫驚して、自分で自分を見るやうにした。二二三の停留場を過ぎると、電車はやがて満員となつた。車體の動搖、車輪の轟き、停留場毎に起る乗

客の混雜、それが疲れ切つたかれの神經に名狀することの出来ない苦痛を與へた。辛うじて家に歸つた時には、丸で難破した船の水夫でもあるかのやうな氣がして、膝の接合點は離られるやうにだるく、體は綿のやうに疲れて、そのまゝ、疊の上にごろりとならずにはゐられなかつた。かれは母親に熱い湯を一杯貰つて飲んだ。

夕飯だけは食ふには食つたが、何うしても起きてゐる元氣がないので、そのまゝ、かれは床の上横つた。この體のだるさも、この熱も、このなやみも、明朝にさへなれば、何うにかなるだらうとかれは思つた。若い者に取つては、睡眠はこの上なき療養である。春の夜なのに、枕を濡すほどの悲しい戀の涙を流しても、一夜すぎて朝になれば、遠い夢か何ぞのやうになつて了ふことがよくあるものである。こんなことを思ひながら、かれは間もなく眠りに落ちた。

しかしその夜はいつものやうに安眠することが出来なかつた。眼を覺す度に、體は氷のやうに冷えてゐるのを感じた。初めは、氣候の寒い故かとも思つて見たが、それは矢張多量の血液の損失から來た結果であることがやがて獨りで理解された。で、うとくと半眠半醒のさまで曉に及

んだ。

會社は休むことにした。

その日は朝から雨が降つて、濡れた山茶花の紅白が美しく硝子障子を透して見えた。宗彦は終日床の上にとくして暮した。心は限りなく鎮靜して、時には眠り、時には覺めてゐるが、その現ともなく夢ともない状態は、さながら鐵路を走る汽車の次第に速力を緩めて行くさまに似てゐた。それはいつか停止せずには置かないのにきまつてゐるが、しかもその停止はまだいつともわからないやうな靜かな靜かな氣分であつた。障子を透して來た雨の日の光線すら、かれの衰へた眼には強すぎるやうに思はれた。

雨は靜かに音もなく降り頻つた。

宗彦には喜びも悔みもなかつた。かれは唯靜かに横になつた。二三日の間、かれの頭は丸で白紙のやうであつた。澄んだ靜かな心には何の影も掠めて通つて行かなかつた。何か思ひ出すこと

があつても、それを思ひ廻らすのが面倒である位に、かれは弱く弱くなつた。このまゝ死んで行くなら、死も好いものだなど、も思つた。

何遍となく霜が白く降つた。庭の楓はいつか眞赤になつて、病床の障子を明るくした。晝間眠るのは心持が好かつたが、夜寝られないので成るだけ起きてゐるやうに心がけた。夜が更けて一夜が明けて行くのに眠られずゐるのは辛いものであつた。かれは曉近く戸外に吹き出した風の音などを幾夜か聞いた。

眠ると、盗汗がびつしよりと寢衣を濡した。この盗汗、この不愉快な盗汗、今夜もまたそれが出るのかと思ふと、夜の近寄つて來るのが恐ろしいやうな氣がした。けれど、明方僅なる眠を食つてからの午前の心持は、何とも言はれず好い氣分であつた。生れたばかりの赤坊のやうな氣分であつた。あたりのしんとした朝の室の内に、線を成してさし込んで來た初冬の午前の日の光線を浴びながら、靜かに床の上に仰臥した心持は、何とも言はれなかつた。

かれは障子を隔てた外の忙しさををり／＼頭に浮べて見こ。

ある日の午前には、初冬の日の麗らかに暖かい四疊半の方に床を移した。

「大丈夫ですよ。まだその位の力はありますよ。」

かうは言つたもの、矢張、母親の力を借りなければならなかつた。

かれは青空を寝て眺めながら、若い女——美しい女を思ひ浮べた。母親の慈愛に比較して考へては罪深い事であるが、もし、かれの世話をして呉れるものが、母親でなしに、若い美しい女であつたならば？ 生きた戀に包まれてゐる身であつたならば？ しかし、そんな幸福は、この世では、かれには遂に遂にやつて來ないものであつた。悲しくとも、または他から見ても可哀相に思はれやうとも、何うもそれは止むを得なかつた。

しかし、かれは思ひ返した。さうした樂しさうな結婚生活、その生活とて、決してさう大した幸福なものではないに相違ないと思つた。妻を持ち、子を持ち、年老いて、矢張、同じく死んで行く人間の一生を考へて見ると、自分の若い死もそれと比べて五十歩百歩に過ぎないやうな氣がした。

ふとかかれは枕元に置いてある一冊の書物を取つた。それはメレジコウスキイの「先驅者」であつた。字が細かいので、眼が疲れて澤山は讀めなかつたが、それでも、昨日あたりから、あの多能多才なレオナルドの痛々しい衰頹のところにか、つた。いろいろなことがかれの心を惹いたが、中でも、あゝした天才さへ死に面してはじつとしてゐられなかつた苦悶のさまが、かれに言ふに言はれない驚きを誘つた。宗彦はをり／＼本を傍に伏せては、長い間、黙つてじつと空間を見詰めた。

それに比べると、かれの死などは、唯徒らに腐つて行くやうなものであつた。今までにもかれは何物をもこの生命の流の中につかむことが出来なかつた。否、將來生きてゐたからとて、矢張同じやうに何も捉むことは出来ないに相違なかつた。しかも、その平凡が、却つてかれに平靜な心を齎らして來てゐるのであるのに氣がついた時には、かれは不思議な心の衝動を覺えた。天才なればこそ、その死に對する苦悶——あのやうな慘ましい苦悶があつたのであつた。レオナルドなればこそ、あれほどさまざまの生効のある事業に一生を打込みながら、死に面して自分の生涯の



徒勞であることを痛感したのであつた。宗彦は何もないかれの一生、さびしい平凡なかれの一生が何の理由、何の因縁があつて、この永久の生命の流の中にひよつこり浮んでそしてまたひよつこり消てえ行つて了ふかを考へて見た。  
暫くしてかれは再び「先驅者」を取上げた。

## 黄い麥畠

岡山の停車場に着いて汽車を下りると、上りの列車が既に來てゐる。明日播磨の松めぐりをしやうとすれば、すぐその汽車に乗替へて旅を続けなければならぬ。

「何うする？ 松めぐりをするかえ？」

此方から向うの線路に渡る橋の階段をのぼりながら、私は女と女の母親の竝んで歩いてゐるの

に聲を懸けた。

母親はちよつと娘に問ひ懸けるやうな態度を示したが、女はそれに答へずにぐんぐん歩いて行くので、

「何うする？ お前？ 行くかえ？」

「今夜の急行で歸りませうよ、もう。」

それは私に取つては大きな爆弾であつた。私はその言葉の中にかの女の歸京を待つてゐる男はつきりと見た。また女の自分に背いた心をまざくと其處に發見したやうな氣がした。女はかうした旅を一日でも餘計につけてゐるよりは、一刻も早く東京に歸りたいのである。そして男に逢ひたいのである。男に離れるために出て來た旅でゐるだけそれだけ、いざ逢ひたいとなると矢も楯もたまらぬやうに歸りたく逢ひたくなつてゐるのである。私は赫とした。私はその爆弾のために體も足もすくむやうな氣がした。

それに、女が私に盡さなければならぬ義務、それも今夜急行で歸つて了ふとすれば、その後

務を實行させる機會ももうないのである。これでこの歡樂の旅もお了ひになつて了ふのである。そして女は男の懐に熱した心で飛込んで行つて了ふのである。――あらゆる犠牲も、あらゆる浪費も、あらゆる真心も、すつかり水の泡になつて了つた。私はまた赫とした。

ぞろ／＼と乗客の出て行く群に交つて、私達は黙つて停車場の出口の方へ行つた。私はもう口をきく元氣もなかつた。冷と熱とが強く私の體の中に往來した。自分の馬鹿を罵つて見ても何の役にも立たなかつた。

女は停車場前の旅舎にでもちよつと荷物を托して、此の市にある大きな公園でも見物して、そして六時半の急行に乗る積りでゐたけれども、私の未練は何うしても、それでは満足が出来なかつた。松めぐりはやめにするにしても、今夜一夜は何處かこの市の靜かな旅舎に泊つて、そしてもう一度女の心をつかむことに力を盡さなければならぬと思つてゐた。假令それはインボシブルにしても、何等かの形式で、女をひどく酷めてやるか、それとも死ぬほど愛してやるかしなければならなかつた。で、銘々重い荷物を一つづつ、持ちながら、停車場前の旅舎をぐずぐず言ひな

がら通りすぎて了つた。

停車場から市の中部に行く電車は客を満載して、私達のぐすく歩いてゐる傍を掠めて通つて行つた。

「何うするの？ 一體？」

女はいくらか疝癪が起つたといふ風で言つた。

「そこいらにあるだらう、旅舎が——。」

「そこらにつて何處なの？ 此方に来ちや、俤も何もなくなつて了ふぢやないか？」

「だから、さつき乗らうかつて言つたんだ……。」

「だつて、行つちやつたんぢやないの？ あの俤は？」

「またすた／＼歩いた。」

「一町ほど来てまた女は言つた。」

「何處まで行つたつてしやうがないわね。電車でなり何でなり行きませうよ。貴方の知つてゐる

ところへ——。」

「何處も知らないんだよ。」

「さつき知つてゐるつて言つたぢやないの？」

「知らないんだよ。」

「知らない位なら、停車場前にいくらでも旅籠屋があつたぢやないの？」

かうピリ／＼した調子で女は言つたが、丁度其處に巡査が立つてゐたのを見て、傍に行つて、此の近所に然るべき旅舎がないかと訊いた。

巡査は頻りに丁寧に教へて呉れた。

第一流と言ふわけには行かないけれど、親切で、靜かで、客にわるい心持などを起させないM屋といふのがつい半町ほど向うの酒屋の角を入つて行つたところにあるといふことであつた。それはもう四十先きの、やさしい親切な莞爾した巡査であつた。

行つて見ると、果して向う側に小さな酒屋があつて、その角にM旅館と言ふかなり眼に立つ廣

告が出て居た。私達は止むなく其處に行くことにした。

二

餘り綺麗でない細い露地、その構へも旅舎といふよりも寧ろ下宿屋と言つたやうな家、色の淺黒い背の高い上さん、何となく陰氣な空氣、さうしたもののがやがて私達の眼の前にあつた。通された室は、それでも此家では一番好い室らしく、床の間や室の粧飾は何もなかつたけれども、それでも南に面した静かな明るい二階の八疊で、庭を隔て、大きな柳の緑の氈々としてゐるのが私の眼と心とを鮮やかにした。これで女さへ今夜の急行で歸るといふ思ひ立を撤回して、ゆつくり公園にでも行つて見物して、静かに一夜泊ると言ふならば、別に副室もあるし、静かではあるし、決して不愉快な旅舎ではなかつたのであつた。

「何うする？ 茶代は？」  
「かう私は訊いた。」

その質問の中には、無論、泊るか、急行で歸るか、この二つの一つを私は訊いてゐるのであつた。

「いつもの通りで好いぢやないの？」

「でも、泊ると、泊らないでは、茶代の置き方が違ふからね。」

「……………」

女は黙つてゐた。

母親は傍から取りなすやうに、

「今夜、これから急行で歸るんでは、くたびれてゐるし、先生だつて大變だから、泊つてゆつくりしてつたら何う？」

と、女は顔を擧げて、

「こんな家になんか泊つたツてしやうがないわ。泊るツ位なら、松めぐりをするんですもの。」  
「何うしても歸る……戀しい男の方へ、待つてゐる男の方へ……私の體はまた震へ出して來た。」

私はごろりと横に倒れて、そして溜息をついた。

「茶代は……」

私は黙つて財布からいつものだけの金を出して其處に置いて、そして今度は仰向けになつて、両手を後頭部に組んで、そしてうつろな眼で天井を見詰めた。さつきの上さんが其處に浴衣を持つて来たのも、茶代の禮を言つたのも、大きな柔かな枕を持つて来て自分の頭に宛てがつて呉れたもの、何も彼も夢中であつた。

女と母親とはやがて浴衣に着物をきかへて、そして汽船やら汽車やらの昨日からの旅の塵を拂つたり何かした後、

「貴方、浴衣を着換へたら何う？」

かう女は私の傍に来て言つた。

「放つて置いて呉れ？」

「……………」

すつと女は立つて行つた。

「何うかしてるのよ。お冠をまけてるのよ。」

かう小声で母親に言ふのが大きな雷聲のやうに私の耳にはきこえた。

「大きなお世話だ！」

私はかう怒鳴つた。憎んでも憎んでも足りないやうな憤怒が私の體中にこみ上げて来た。

「さうなの？ なら勝手になさいな。」

「することも、勝手に……………」

私はすつくと起き返つた。怖い目をしてゐるのが自分にもわかつた。

女が何か言はうとしたのを、

「およしよ、お前。」

かう言つて母親は袖を引いた。

二人はやがて手拭を持つて、風呂へと下りて行つて了つた。私はぐたりとまた横に倒れた。憤

怒と悲哀と自ら自分の愚劣を罵る心とが一緒になつて、眼に見えるものがすべてぐるぐる廻るやうな氣がした。大きな溜息がまたひとり手に出て來た。

大きな美しい柳の緑が風に靡いて、それに午後の日が靜かにその葉と葉に細かくさし込んでゐるのが、さうして寢てゐるうつろな私の眼に映つた。一人の旅だつたら、この柳の緑も何んなにかすぐれた旅の興を起したであらうに……。かう思ふと、私の愚かさが愈々悲しくなつて來た。私は起きて見たりまた寢て見たりした。

暫く經つた。

最初に風呂から上つて來た女は、室の隅に置いてあつた鏡臺を日の暖かにさして來てゐる副室の方に持つて行つて、そこで例のおつくりを始めた。そこに母親もさつぱりしたやうな顔をして上つて來て、そして何か小聲で話し始めた。それは母親が私のために娘の思ひ立を翻へさせやうとしたのであるけれども、その二人して小聲で話してゐる形が却つて私に強い反感を起させた。母親が説いてもそれでも女は容易にその急な思立を翻さなかつた。

女はやがて自分のおつくりをすませて、母親の髪を梳いて直してやつたりして、そして此方へとやつて來た。

みだれ箱の中に入つてゐる金の小形の時計を女は見えて、

「まだ、三時間あるから大丈夫よ。行つて見て來ませう、母さん。減多にまた來やうたつて來られやしないから。」

母親は私に、

「先生もいらつしやいな？」

「いや、僕はよ……。此處の公園なんかもう幾度も見たんだから、見たくもない。」

「そんなことを仰有しやらずに……。」

「いや、もうよす……。お伴は御免だ。案内者はもう眞平だ。」

女はブツとしたらしく、

「案内なんかして貰はなくつたつて好いわよ。」

手を鳴らすと、それに應じてさつきのお上さんがまた上つて来た。

「公園に行つて来るんですがね、俵を二臺呼んで下さいな。」かうやさしく言つて、「一二時間あれば行つて来られますね。」

「え、え、行つて入らつしやられますとも……。四時までは誰でも入れる時間になつてをりますから……。」

「遠いんですか。」

「ちきで御座いますよ。歩いて行きましたも、いくらもなひんで御座いますから……。では、三臺で御座いますね。」

「旦那はいらつしやらないさうですから、あの二臺——」

「さやうで御座いますか。」

上さんはこの人達が突然入つて来て、そして何處かそぐはないやうな空気があるのをいくらか不思議にしてゐるが、始めてわかつたといふやうにして、風呂にも入らずに寝てゐる男と綺麗に

おつくりをしてこれから見物に出かけやうとしてゐる女づかをと較べるやうにして見た。

「何うしても入らつしやらない？」母親は私の傍に寄つて来て、「ゐらつしやいよ、そんなことを仰有らずに……。」

「いや、二人して行つて来て下さい。僕はくたびれた……。寝て待つてゐる方が好い。」

「さうですか？」

爲方がないといふやうに、母親は娘と一緒に出發して行つた。

三

二人が出發して行つてからかなりの長い間、私は寝たり起きたり、柳の緑を見たり、午後の日の長くさし込んで来るのを眺めたりしてゐるが、ふと自分も矢張昨日からの汽船や汽車に乗つて體が汚れてゐるのを思ひ出して、そのまゝ立つて、さつきから其處に置いてある浴衣に着換へて、そして階段を下りて風呂場へと行つた。

静かな風呂場はいくらか私の心を静めるに効があつた。簡素ではあるが掃除の行届いた風呂場、小さな笥から氣持よくちよろ／＼落ちてゐる綺麗な水、明るい硝子窓からは小さな瀟洒な庭園が見えて、アネモネの赤い花が餘りしつこくなくとところ／＼に點在して裁ゑられてあるのが私に印象派の繪を見るやうな感じを起させた。透きとほつた湯に入ると溢れて、焼けた銅壺にチツと浸み込む匂ひが快よく私の鼻を衝いた。

私はいろ／＼なことを思ひ出さずにはゐられなかつた。一番先に、今度の長い旅が繪巻のやうになつて私の眼に映つて來た。或は海に面した旅舎、或は潮の深くさし込んで來る夕暮の朱塗の耐殿、或は若葉の日にかゝやく中に白く漲つて落ちる小さな瀑布、或は山合の宿驛の世離れたいかにも田舎らしい旅舎、そこにも此處にも私達の姿があつた。感情は時には縛れ時には碎けた。時には何うしても離れ難ない愛着を感じ、時には憎んでも憎んでも足りないやうな憤怒を感じた。決して他で見るやうな面白い旅行ではなかつたことなども私は思つた。

「要するに、俺が馬鹿なんだ……。」

かう私は口に出して言つて見た。

これまでも何遍かうしたことがあつたか知れない。馬鹿な眞似を、人に笑はれるやうな眞似を何遍繰返してゐるか知れない。それでゐて捨て去ることが出來ずに、かうして怒つたり笑つたりしてゐる……しかし、今度はもつと強く出てやらなければならぬ。いつまで馬鹿にされてゐたつて際限がない。かう思ふと、それをすぐ裏切るやうなさびしさが強い力で押しよせて來た。そんなことを際限なく繰返して、風呂に入つてゐたのはかなり長い間であつた。愚かな私は今でも猶ほ今夜の急行で歸ることを女が思ひ留ることを望んでゐた。事によつたら、かの女は思ひ返すかも知れない……。一夜位何うでも好いと思ふかも知れない……。風呂を出て、鏡に顔を映してゐる時に私はそんなことを思つた。

かう思ふと、それほど他の男に引張られてゐる女を、何故自分は此方に引張らうとするのであらうかなどと考へた。とても駄目なのは知れ切つてゐる。今夜その思ひ立を引留めたところで、永久にそれを引留めて置くことは出來ないのは知れ切つてゐる。いつかは必ずその男に熱した心



を以て抱かれて行く女である。しかしさうかと言つて、駄目と知つたからと言つて、そこから平気で引返して来ることは出来なくなつてゐる。私はこれまでもさうしたジレンマにかゝつて、さういふ場合の金の貴さを思つたことは度々あつた。自由にならない女を金縛りにする男達の心もはつきり共鳴が出来るやうな気がした。

「戀か？ 意地か？」

いや、意地ぢやない。矢張戀だ。戀したものは當然かうした敗北の位置に立たなければならぬのである。こんなことを考へながら私は階段を上つて来た。

私は時計を見た。

もう五時に五分前である。二人の見物が遅れて、六時の急行に間に合はなければ好いなどと私は思つた。

上さんは上つて来た。

「僕は酒を飲むから、何がなくつとも好いから持つて来て下さい。」

「もう、御膳を上げませうか。」

「いや、御膳は一緒に好いから——歸つて来てからで好いから、酒だけ持つて来て下さい。何か一品あれば好いから……。」

承知して上さんは下りて行つた。

刺身の一皿を肴に、五六杯飲んでゐるところに、二人は歸つて来た。

女は矢張打解けない顔をして、じろりと此方を見たが、

「随分好い色ね。」

「……。」

「一人の方が好いのね、矢張、貴方には？」

「うむ……。」

「今度から一人でゐらつしやいね、一人の方が気が揃つて好いから。」

「本當だとも……一人の方が気が揃つて好いよ。」

「馬鹿々々しい。本當に……。」

かう女は突放すやうに言つて、「母さん、ちつ支度をしないとおそくなるよ。」

「あ、。」  
母親はいくらかまごついたやうにして信女袋の前に座つた。

「面白かつたらう……。」

「え、面白う御座んしたよ。」

「まア、たんと面白がる方が好いや——。」

「え、さうですとも、貴方なんか相手にしてはゐられないわ。本當に氣むづかしやなんだから……。」

「大きなお世話だ！」

「もうお世話の焼きつこはしますまいね。別になりませうね。」  
この「別になりませう」がぐつと私の胸に來た。

「勝手にすれば好いちやないか。」

「勝手にして好いのね。本當に好いのね。母さんが證人ですよ。」

「好いどころぢやない……。」

「屹度ですよ。」

女の眼もいくらか据わつてゐた。女が眞剣で怒つてゐるのは私にもわかつた。

「馬鹿！」

私の憤怒は次第に高まつて來た。

「馬鹿でも何でも好う御座んすよ。貴方になんか、ちつとも世話になんかなつてゐないんだから……。」

「……。」私は何か言ひたかつたけれども、雑多な念が潮のやうに押寄せて來て、そして込み上げて來て、遂に言葉らしい言葉も出なかつた。  
そこに上さんは膳を運んで來た。

忽ち水を打つたやうな沈黙が一座を占領した。私は唯低頭してぐい／＼と盃を口に持つて行つた。上さんがそこに膳やお櫃を並べ終つた時、

「母さん、それぢや早く食べませう。間に合はないといけないから。」  
「急行でいらしやいますんですか」

「え……。」

「左様で御座いますか。それはお忙しいんで御座いますね。」私のぐい／＼盃を口に當て、ゐるのを見て、「旦那も御一緒ですか。」

女達はそれに答へなかつた。私はいくらか狼狽て氣味で、

「あ、さうだよ。」

「それでは御急ぎになる方が宜しう御座いますね。」

「うん、さうだね。それぢや僕も飯にしやうかう。」言つて盃を置いて、私は膳に伏せてある茶碗を起した。その時は女達は既に黙つて箸を取つてゐた。母親はそれでもいくらか心配さうに、い

つもならば、膳の上の肴の批評などをしながら靜かに箸を取るものであるのに、今日は低頭き勝に曇つた顔をして、頻りに漬物なぞを突つてゐた。

女も憤怒と激情とのために飯も碌々咽喉に通らぬらしかつた。一杯辛うじてすませてそしてすぐ茶にした。

「お輕う御座いますね。」

「何だか今日は胸が一杯で……。」眞面目に笑ひもせず女は言つた。眼は赤く充血してゐた。

私も飯は咽喉に通らなかつたのを辛うじて二杯食つて、

「すぐ勘定をして來て呉れ！」

女の膳を片手に下けながら、上さんは不思議さうな顔をしてかしくまつて下りて行つた。

「此方でするから好う御座んすよ。」

突然女が言つた。

「いや、今日の分までは己がする……。俺がつれて來たんだから。」

「……………」

「先生、そんなに怒らなくなつて……。」「母親はなだめるやうに、「内の奴も勝手ですからね。…」中に入つて私が困つて了ふ……。』」

「母さん本當にお困りだらうけれども、何うも爲方がない。」

「でも、折角伴れて来て頂いて、こんなことになつちや——」

「構はんで置く方が好いのよ。母さん。お互ひに勝手にする方が好いんですよ。その方がさつぱりして好い。」

「本當だ……。』」

皮肉に私は言つて、私の荷物をまとめて、そこに持つて上つて来た上さんの勘定書を見て、それを拂つて、そして、すぐ立ち上つた。しかし流石に女達の荷物をもほつたらかして出て来るには忍びないやうな氣がしたので、私は大きな信玄袋を持つて下に下りた。女達も慌て、下りて来た。

幸ひ宿の女中が停車場まで荷物を持つて来て呉れると言ふので、私は空身でサツ／＼と先に立つて歩いた。私の胸の中は火のやうに燃えた。何が何だかあたりのものなどは眼に入らなかつた。旅舎の手前、女中の手前、きまりがわるいなど、も思はなかつた。私は唯此處を遁れたかつた。逸早くこの心の修羅場を遁れて何置かに行きたかつた。眼と頭がぐらくした。女達も急いで後からついて来た。

「そんなにおいそぎにならないでも、まだ時間が御座いますから。」

荷物を持つて喘ぎ喘ぎついて来る女中の聲がした。

来る時はさう近いと思はなかつた停車場は不思議にもすぐ私の前に来た。しかし乗客が大勢集まつてゐるといふことより他に、私の眼には何物も映らなかつた。私はそれでもついて来る女中に銀貨を握らせることを忘れなかつた。

二つの怒つた獸を私は其處に發見した。女の眼が血走つてゐると共に、私の眼も血走つてゐたに相違なかつた。眼と眼、心と心が互ひに睨め返した。「勝手にしやがれ！」と私は心の中に叫

んだ。

母親が寄つて来て、

「切符は？」

「別々にしませう。僕は途中何處かで下りるかも知れないんですから、僕は僕で買ひます。」

「でも、折角……。」

それを遮つて、女は

「母さん、さうなさいよ。その方が好いのよ。見つともない。人が大勢見てゐるぢやないの？」

私は眼を鋭くして、

「言つたことを忘れちやいかんぞ！」

「貴方こそ……。」

ツと離れて、私は其處に開かれた二等の Booking Office の前に行つて、東京までの切符を一枚買った。そして急いで、通けるやうにして改札口の方へ行つた。ふとあとから誰か、追ひかけ

て来たと思つたから、それは改札口のところで私の落した紙幣を拾つて乗客の一人が持つて来て呉れたのであつた。それほど私の頭は混亂してゐた。私は傷いた獣がかくれ場を求めらうにして、また自分の受けなければならぬ運命は深く受けなければならぬといふやうにして、大勢の乗客の混亂してゐる中を急いで橋をわたつて向う側に行つた。

上りの汽車はもう来てゐた。

## 四

私は二等室に入つてから、ほつと呼吸をついた。そしてすぐ四邊を胸した。

淺間しいと言つて好いか、悲しいと言つて好いか、それともまた弱い人間の姿と言つて好いか、あとを追つて来る女達の姿のそこらに見えないのを發見した時には、私は何とも言はれないさびしさを總身に覺えて、頭のぐらくと眩惑するのを感じた。自分で通れて来て居ながら、または自分で破壊して来てゐながら、その逃遁が、破壊が堪らなく私には悲しかつた。

もうかれ等も私のあとを追つて来ない……かう思ふと、立つてゐるてもゐられないやうな気がした。

もう薄暮になりつゝ、ある灯のついたブラットフォームを乗客は織るやうに往來した。無数の顔、男と女の無数の顔、その中にも、私はもう愛したものの、顔を發見することが出来なかつた。しかし男の持つた一種の矜持は、その漲るやうに押寄せて來た悲しい心と相戦つた。私はぐたりとクツシヨンに體を下した。

私は肱を車窓に當て、わざと別の方を見やうとした。

段々心が落附いて來た。と、これですつかり別れて了はうといふ心と、否、こんなことではわかれられない、これで別れては男としての面目に關するといふ心とが兩方から出て互にその位置を争つた。それにまだ本當に別れたのではないからといふやうな未練も出て來た。ついでいろいろの雜念がこんがらかつた絲のやうに集つて來て、そしてそれがさまざまの光景と雜り合つた。自分で勝手な眞似をして居りながら、怒るとは何ういふ氣だ……。かう思ふと女に對する憤怒が

また新しく湧き返つて來た。

汽車は靜かに動き出した。

かれ等も何處かに乗つてゐるに相違ない……。この列車で歸るより他に途はない。かう思つて見たが、ついで或はかれ等は憤怒の結果、同じ列車に乗るのを厭つて、そして一汽車後れさせたかも知れないと思つても見た。と、堪らなくさびしい氣がした。しかし、一刻も早く東京に歸りたい彼等がそんなことをする譯がないとすぐ思ひ返した。

何う考へて見ても、とても割り切れない數を自分は割らうとしてゐるのである。とても駄目なことを自分はしやうとしてゐるのである。自分のものでない眞珠を自分のものにしやうとしてゐるのである……。そこまで突込んで考へて行くと、今までやつて來た努力が、徒勞がまたしても憤怒を湧き返らせて來た。私は堪らなくなつたやうに、背と足を丸くして、クツシヨンに顔を押し附けるやうにしてごろりと倒れた。幸ひに車の中はさう込んでゐなかつた。

ゴオといふ響と、ゴトンゴトンといふエンジンの音と、夜の闇を切つて進んで行く大風に似た

氣勢とがそれと聞取られるばかりで、灯を後にした私の頭には、室内の種々の人達の状態も話聲も何も彼も入つて來なかつた。黄いもの青いものまたは金の輪のやうなものがチラ／＼と私の目の前に舞つた。

ふと女は何うしてゐるだらうと思つた。母親と自分のわる口を言つてゐるだらうか。かう思つて見たが、しかし私にはさうは思へなかつた。女も矢張自分のやうに憤怒に、激情に、または孤獨に虐まれてゐるに相違なかつた。眼を赤くして、一ところを見詰めて、そして深い複雑した思ひに悩まされてゐるに相違なかつた。

こんなことを思つたり何かしてゐる中に、一日の疲勞が出たと見えて、私はいつかうと／＼した。

しかしそれは辛いまたは淋しい佗しい假睡であつた。汽車の停車場にとまる度毎に私は眼を明いた。何處だらうと思つて半ば起き上つて覗いて見た時には、「かこがは」といふ字が映つて見えた。女にその男がありさへしなければ、自分達は此處で下りる筈であつた。そして例の「松づく

し」にある高砂の松や會根の松を見て歩く筈であつた。書生時代に見たあのめづらしい「石の寶殿」の怪奇な石も見ることが出来る筈であつた……。私はまたうと／＼した。

ある大きな停車場の明るい灯、大勢出たり入つたりする乗客の混雜、「あ、もう神戸だ」かう夢現に思つたのにつゞいて、さつきの激情と憤怒の餘炎が、「いつそ大阪か京都で下りやうか知らん！そして、何處か静かなところで一夜ゆつくり寝て行かうか知らん」と私に思はせたが、しかしそれは唯ちよつと思つて見たゞけで、すぐ私は再び體を海老のやうにして眠つた。

段々汽車は込んで來た。大きなトラックや、信玄袋や、旅鞆を提げて男や女が多勢割り込んで來た。私は愈々足や體を縮めなければならなかつた。

大阪に來た時には、いかに小さく海老のやうになつても、もう私は寝てゐられなくなつた。

ボウイは新しく乗つた客のために長く横つて寝てゐる人達を起して歩いた。私は半ば疲れて眠つてゐる目を大きく明いて、そして黄い塵の舞つてゐるやうな灯をじつと見つめた。頭はがらんとしてゐた。何を考へることも出来なかつた。

寝るより他に爲方がないので、腕を車窓に凭らせて、顔を掌で押へて、そして眼をつぶつて見ただけでも、何うしても旨く眠られなかつた。座つて見たり、また後向になつて見たりした。足を長く延して隣の乗客の荷物に身を凭らせて見たりした。それでも矢張眠らない中に、京都もすぎ、逢坂山のトンネルも踏え、晝ならば湖水の眺望の美しい大津へと著いた。

停車場の大きな時計はもう十二時を少し過ぎてゐた。何うしても眠いので、終には、私はこれも矢張隣で海老のやうになつて寝てゐる男の尻のところに、無理に自分の體をわり込ませて、頭を女客の荷物の間に入れて、何うやら彼うやら安息を得るだけの位置をつくつた。私はまたうと／＼して眠れない眼を續けた。

さういふ風に、體も心も非常に勞れてゐるにもかゝらず、眠りから少しでもさめて來ると、女と別れなければならぬ大きな悲哀が冷たい鐵の棒か何ぞのやうに自分の體の中に横つてゐるのに邂逅した。思ひ捨て、も思ひ捨て、も、女は私の體に絡み附いて來た。

「まいはら、まいはら……。」

さうした車掌の呼聲を私は夢現の中にはつきりと聞いた。

しかし、そこを過ぎ去つてからは、その隣の客が北陸線に乗り換へて、いくらか體を置く位置が自由になつた、めか、それともまた勞れて今は何うにも彼うにもならなくなつたためか、私は深い睡眠に落ちて、汽車が名古屋を通過するのをも知らなかつた。

何か悪夢にでも魔はれたやうに、自分から唸き聲を立てはしないかと思はる、ばかりに、何か恐ろしいものに追ひかけられてゐるやうな心持がしたが、それが次第にさめて來ると、ほの／＼と夜の明け始めた空がそれと見えて、ついで、冷めたいその鐵の棒が再び自分の胸に支えてゐるのを夢現の中に入れて來た。

いつ覺めるとなく次第に目が覺めて來た。

私は半ば身を起して、すぐ前のガラス窓を一枚開けた。涼しい心持の好い朝風が入つて來た。

私はほつと呼吸をついた。

私の眼の前には、初夏の曉のさまが美しく動いて展げられてゐるのが見わたされた。小さな赤



松の生えてゐる丘があるかと思ふと、さびしい草薺の農家が點々としてあらはれて、そしてそれがまた丘と丘の間に展げられた黄く熟した麥の山島になつて行つた。

私はクツシヨンの上に座つて、じつとその黄い麥島を見た。

車内では私の他にはまだ誰も起きてゐなかつた。縦に、また横に、昨夜最後まで、白い顔をくつきりとあたりに見せて起きてゐた丸髷の女も、曉近く眠を催して來たと見えて、乗客と乗客との間に小さく身を横にして、顔に白い手拭をかけてそして靜かに眠つてゐた。室内にも曉の靜けさが、名残なく横つて感じられた。

空にはいくらかの雲があつて、それに漸く光を放ち始めたらしい日の光線が佗しいオレンジ色に映つて見られた。

黄い麥島は麥島にツイいた。

じつとそれに見入つた私は、俄かに堪へ難い體も沈むやうに悲哀の全身を襲つて來るのを感じた。そしてその悲哀はじつと見つめた黄い麥島に雜つて落ちて行くやうな氣がした。涙はひとり

手に頬を流れた。

かうして辛い争ひの人間の上に、朝が再びやつて來たことが堪らなく私を悲しくした。泣いても泣いても泣き足りないやうな氣がした。

「おほふ」素通をして過ぎて行つて了ふ停車場の名を私は涙に曇つた眼の中に見た。

麥島は麥島にツイいた。

私は思つた。この朝の悲哀は、この黄い麥島は一生私に取つて忘れられないものであらう。女と別れて了つても、または女はこの世にゐなくなつて了つても、この朝の黄い麥島の悲哀は、永久に忘れられないものとして私の頭に印象されて残るであらう。かう思ひながら私はじつと動いて行く朝の田園のさまを眺めた。

五

豊橋に來て、顔を洗はうと思つて、ブラットフォームに下りかけると、そこに女の立つてゐるの

を私は見た。それと同時に女も私の方を見た。  
女の眼は赤かつた。

その眼の中にはまだ昨日の歌が動いてゐた。私の眼にも矢張その歌が動いてゐたに相違なかつた。女は潮踏でもするやうにして静かに此方に近寄つて來た。

### 燈臺へ行く道

石切場の崖の上の小屋には、朝日が朗らかにさして、そこから前に展けられた海が一目に見渡された。岸の處々には、棋石のやうに散ばつた黒い岩に波が碎けて、向ふに岩石の岬が象の鼻のやうに長く大洋に向つて突出してゐた。

石を切る下に使はれてゐる女達は、狭い小屋の中に男の勞働者と一緒集つて、何か頻りに饒

舌つて笑つてゐたが、時間が来ると、やがて崖の傍の細い路を通つて、石切場の方へと下りて行つた。それはよくもこんなにかき切られたと思はれるほど深い大きな谷で、崖が到るところ鋸の歯のやうになつてゐて、もう少し切りひろげられると、岬端の燈臺へ行く路もそのまゝ崩れて了ふかと思はれるばかりであつた。谷の中には、仕事小屋、水を汲み上げる桔瓶、鐵色に錆びたたり水、石を運ぶためのトロコなどが混雑と見えてゐて、燈臺へ行く路からは、丁度一目にそれを見下して行くやうになつてゐた。

「えらく、深く掘つたもんだね。五六年來ない中に、大きな谷になつちやつた。……さうかな。鋪石なんかには東京で使ふやつかな。ごく軟かな石なんだな。東京から来た人達は、いつもこんなことを言つて、路の兩側に深くひろげられた谷を見下しながら、燈臺の方へと静かに歩いて行つた。

旅籠屋のある海岸から上つて来る路は、始めは砂濱で、草履でも足の汚れないやうなところであるが、小さな坂を上ると、葉の青い草や小松などが生えてゐて、松原の中から出て来た赤ちや

けた路がすつとその石切場の方へと曲つて行つてゐた。尖つた石が到る處に出てゐた。

右にも左にも海が見えて、波の打寄せるさまは繪か何ぞのやうに思はれた。

誰でも其處に来ると足を留めないものはない位であつた。「好いなア、何うだ。向ふは？」指された方には、彎曲した磯濱に白い波が颯つて、松の靡いたのが列を成して遠く向の鼻まで並んでゐた。

白色の高い燈臺はすぐその前に聳えてゐた。光達十海里、一分毎に廻轉する光は、遠洋をわたつて来た船客に、初めて故郷のなつかしさを與へるといふので名高いものであるが、そこまで行くには、遊覧者は、猶ほ石切場の谷の縁のやうな處を通つて、崖の下に横つた怒濤を見下して、赤い毛布のある縁臺の出でゐる二軒の茶店の前を通らなければならなかつた。一軒の方の茶店には、「鮑いつでもありません」などと書いた札が出てゐた。

その茶店には、六十近い岩乗な爺がゐた。「俺はかう見えても、人助ばかりしゑる。この年まで、もう何人助けてやつたかしれやしねえ。御維新の時はまだ十六だつたが、その時そ、沈

没した官軍の汽船の人達を助けたのが手始めでな。もう百人やそこら助けてやつてゐるのだよ。お上からもお褒美を貰つてゐるんだからな。燈臺の鐵爺ツて言へば、誰も知らねえものはねえ。此間も新聞の先生が来て、俺の履歴を十日もつゞけて書いた。』などと言つてよく自慢をした。爺は毎日朝早く天秤棒で手桶をかついで、石切場の谷に添つた長い路を松原の方へと水汲みに出かけて行つた。何んな日にも——何んなに暴風雨の日にもそこにこの爺の姿を見ないことはなかつた。』なアに、この近所でも水は出るがな、石切場の奴達は皆なそれをつかつてゐるがな、水ばかりは溜水ちや氣持がわるいでな、それで、俺アかうやつて毎日汲みに行くんでさ。なアに、馴れてるでわけはねえ。』爺はかう言つて、まだ七歳位の女の兒を伴れて、靜かに松原の方へと下りて行つた。

「孫さんかね？」

何うかするとかう言つてその女の兒の頭を撫で、持つてゐた菓子を呉れて行く都の女達などもあつた。すると、爺はすぐそれを相手にいつも長い長い自慢話を初めた。『全く金づくちや出来ね

え仕事だよ。それでもな、此間はな、女ツ子だツけが、東京の柳原とか言ふところにもんだが、危いところを助けてやつてな、意見してやつたが、誰も引取人がねえ。仕方がねえので、俺ア、旅費をつかつて、伊香保まで送つてやつただよ。でもな、向ふでも喜んでな、御馳走をして呉れた上に金を五兩呉れやした。』路は松原の中に入つて行つても、爺は容易にその話をやめやうとはしなかつた。

松原の松の海岸に降り下つた處に、綺麗な水が溢る、ばかりに湧き出してゐた。爺は其處に行くと、天秤から手桶を外して、それを一つづ、その中に入れた。松の影が靜かに水の上に落ちてゐた。

海岸にある二三軒の旅館でも、飲料水だけは皆な此處まで汲みに來た。赤い襦をかけた女中達に爺はよく聲をかけた。

「何うだね、此頃は客はあるかね？」

爺は昔のことなどを考へてゐた。此處には三十年前には、一軒も家がなかつた。波ばかり高く

開つてゐた。それが、おア、何といふ思ひだらう。大きな旅館が出来て、色の白い女中が来て、夏はつばの大きな麥稈帽子などを冠つた女が大勢海の中に浸つてゐたりした。毎京都の人達がぞろぞろと燈臺の方へ出かけて行つた。そればかりではなかつた。松原の向ふには停車場などが出来て、綺麗な夫婦づれが幾組ともなく其處から此方へとやつて来た。手桶をかついで坂を上つて行く爺の姿はやがて燈臺へ行く路の上に見えてゐた。

二

爺が毎日本汲みに行くその清水のところから、海に臨んだ一軒の旅館の裏座敷が見えてゐた。三軒の旅館の中では、一番新しく出来た家で、廊下を真中に、海に面した室と裏の松原に面した室とが五間ほどあるばかりで、いつも客もさう澤山にやつて来なかつた。爺はその主人と懇意なので、その屋號のついた暖簾を自分の茶店にかけたりして、客が聞くと、いつでも其處に案内してやるのであつたが、しかも他の二軒——ことに大きな一軒の繁昌には及ぶべくも見えなかつた。裏庭はいつも静かで、秋は秋海棠などがさびしく咲いてゐた。避暑客の大抵歸つて了つた十月の中頃であつた。其處にある夜二人の客が来て泊つた。一人は銀行員らしい扮装で、髪を綺麗にかけた色の白い三十二三の男であつた。一人は誰が見てもすぐそれとわかる綺麗な女で、来た時には大きな形の好い丸髷に結つてゐた。純金の指環を二つも三つもはめてゐた。

宿帳には同のき二十一歳と男が書いた。「少し逗留して行きたいんだが、静かな室はないだらうか。」かゝ言ふので、番頭は氣をきかせて海に面した一番外れの八疊へと通じた。茶代も普通よりは多かつた。女中が板を持つて行くと、「お前、何を食へる？ 飲べたいものを仰有い。」と男はやさしい調子で言つて静かに笑つて見せた。「私は何でも結構……。」

女はさびしさうに言つた。

燈臺へ行く道

此處に來る前に、男は車夫に訊いた。「あそこで静かな家は何處だえり？」

「何處でも今は静かです？　もう避暑のお客は皆な歸つて了りましたから。」

かう車夫は言つて、別の大きな旅館の名を教へた。しかし男は「もつと静かなところ。」を望んだ。「ぢや、あそこなら、ごく静かです。」かう言つて、車夫は二人を此處に連れて來た。

二人はわざと汽車には乗らずに、二里ほどある町から車に乗つてやつて來たのであつた。

女はさういふ社會の女に似合はず、イヤに沈んで、口も碌に聞かうともしなかつた。「もとはたしかにさうですけれど、今は藝者をしてるんぢやないかも知れませんか。」そこに給仕に出た女中はこんなことを言つた。

「あくる朝、男は、」

「何うも昨夜は波の音が高くつて眠られなかつた。姐さん、もつと静かな室はないでせうか。」

「では此方になすつては？」

女中はかう言つて、男を裏の松原に面した六疊へと連れて行つた。

「さア、少し陰氣だけでも、此方の方が好いやうだね。ちよつと待つてお呉れ。」

かう言つて女を呼んで

「何うだえ？」

「さうね。」

襖を立て、見て、此方なら、さう波の音が高くはありませんね。」

「こつちにしやうか。」

「え。」

で、二人は其日からその裏の六疊へと移つた、蝙蝠傘に信玄袋に、インパネスにコートにメリンスの風呂敷包、女は信玄袋の中から紙だの化粧道具だのを出した。その一間には松原を透して微かに夕日がさし込んで來た。根の上つた松の下にはまだ青い草がところどころに生えて、向ふの路を通つて行く漁師の唄などが静かに聞えた。夜は静かに月の光がさしてゐた。

「いかゞで御座んした？ 波の音は？」

「此處なら餘程好い。」

「さやうで御座いますか、此方は波が高う御座いますもんですから……何うかすると、嘔じいなんて仰有る方が御座います……。」

女中はかう言つて、朝飯の膳を下けて行つた。

小さな庭には、秋草がまだ残つて、桔梗があはれ氣に咲いてゐた。庭を掃除に来る奴僕の男は、女が机の上に小さな鏡を立て、頻りに化粧をしでゐるのを見た。

「女の方の方が病氣かもしれないよ。」

「さうかも知れないね。」

「しかし肺病とも違ふやうだけれど……。」

「さうね、咳嗽なんかしないね。」

こんな噂を女中達はした。三日目の朝に、番頭がわざ／＼出かけて行つて訊くと、二週間位

たい積だ。かう男は言つて、財布から金を二十圓出してわたした。その他に一圓纏頭を呉れたので、番頭はへい／＼頭を下けて戻つて行つた。

来た翌日、二人はちよつと海岸の方へ出て行つたが、三十分も経たない中に歸つて來た。それからは滅多に外に出やうともしなかつた。男は何うかすると元氣な調子を見せて、面白い話をして、女中を笑はせることなどもあつたが、女は大抵黙つて、さびしさうな顔をして唯笑つてゐた。

餘りさびしさうにしてゐるので、ちと、お出かけになつてはいかゞです。これから裏の方へまゐりますと、漁師の村がありまして、漁がある時にはそれは賑やかで御座いますよ。それに、犬若ツて言ふところには、面白い岩なぞ澤山に御座いますから。」

かう女中が言ふと、

「行つて見やうかねえ。」

「え、行つて見ませう。」

かうは言ふもの、二人は遂に出かけやうともしなかつた。ある時、女中の一人が松原の中に

水を汲みに行つてゐると、ふと其處に草履ばきの姿を見せた女は、暫く立つて見てゐたが、  
「綺麗な水ね。」

かう言つて、一杯柄杓に口をつけて飲んで、「お、冷めたい。好い水だこと。」

來る時に綺麗に結つてあつた形の好い丸髷は、三日目にはもう壊れて、裏にゐる髪結が呼ばれて行つたが、髪をむづかしいお客さまね。え、え、藝者ですとも……。でなくつちや、あんなに髪を氣にするものはありやしませんよ。髪の出具合が氣に入らないで、私、困り抜いた。」などと言つてゐた。女は今度は銀杏返しに結つた。

その旅館には客は澤山泊つてゐなかつた。二人の他には一組か二組位しかゐなかつた。それに引かへて、大きな旅館には、まだ流石に客がゐて、天氣の好い日には、燈臺の方へ行く遊覽者がぞろぞろと通つて行つた。女は海に向いた室の縁側に立つて黙つてそれを見てゐた。

雨の日はさびしく暮れた。鼠色の雲は低く地平線の上に漂つて、廣い海洋には一帆の影も見えなかつた。旅館の傍を山から流れ落ちる瀧川の水は、黄く濁つて瀧津瀬のやうに海に注ぎ込んで

ゐた。

## 三

ある夜女は言つた。

「姐さん、三味線がありますか。」

「御座います。……碌なのは御座いませんでせうよ。」女中はかう言つて立つて行つたが、やがて三味線を其處に持つて來た。

それは家の女中達の弾く稽古三味線で、天神などがぐらぐらしてゐた。「ひどい三味線ね。」かう言つて、女は糸を直したり紙を挿んだりしてゐたが、暫くすると、其處から靜かな爪弾の音が洩れて聞えて來た。

常に似ずめづらしく女ははしやいで、常盤津だの清元だのをそれからそれへつゞけて弾いた。女中が行つて見ると、男も機嫌のよささうな顔をしてゐた。



女中が所望すると、

「では何を弾きませうね。」

女はかう言つて考へて、「……矢張、常盤津が好いわね。戻橋か何んか。」

やがてあんなボコ／＼三味線から、こんな好い音が出るかと思はれるやうな音が流るゝやうに四邊に漂つて聞えた。むづかしい込んだ相の手が巧に鳴つて、一種言ふに言はれない哀愁が人の腸を断つた。女中は唯恍惚としてそれに聞き惚れた。

やがて女は三味線を下に置いて、

「駄目ね、矢張……」

「結構です。お上手ですこと。」

「矢張、自分の持ちつけた三味線でないと駄目だわねえ。」

「それはさうだね。」

かう言つた男の言葉につれて、女は不意に今までの興がさめたと言ふやうに、三味線を傍に押

しやつて了つた。女の顔にはいつものさびしさがまた上つて來てゐた。もう一つ何か聞かせて頂けないでせうか。かう女中は頼んで見たが、女はそれに應じやうともしなかつた。

三味線はそれから三日も四日も床の間に置いたまゝになつてゐた。

二人が初めて燈臺の方へと出かけて行つたのは、來てから七日目の晴れた朝であつた。昨日の雨は拭つたやうに晴れて、イタリアンブルウとも言はるべき濃い深い碧の空には、白い高い燈臺がくつきりと捺したやうに浮び出してゐた。

「行つて見やうぢやないか。」かう男に誘はれて女は初め草履ばきで出かけたが、少し行つてからまた引返して、今度はちやんと駒下駄を穿いて出て來た。男は坂の半ば迄登りかけた所で、女の急いで此方へやつて來るのを待つてゐた。男は鼠色の中折をかぶつて、セルの單衣に新しい縮緬の帯をまきつけてゐた。

二人の姿は、靜かに坂を登つて、段々石切場の方へと近づいて行つた。やがて大きな谷は二人の前に開けた。工事小屋の傍で、男や女が石を切つたり運んだりしてゐるのが小さく蟻か何ぞの

やうに見えた。工夫の振り上げる槌につれて、柔かい石の崩れて来るのなども見えた。

二人は静かに歩いた。をりくめづらしさうに覗くやうにして谷の方を見た。兩方の海が見え出した頃には、女は男から一二間後れ勝ちになつてゐたが、男はそれを待つてやつて、左の海の方を指して見せたりした。波は凄じく岩に碎けてゐた。

通りすがつて行くあらくれ女の群は、

「好い男だ、役者だんべいか。」

こんなことを無遠慮に言つて幾度も振返つて行つた。

丁度、水汲みに出かけて来た爺は、二人と摩れちがひながら、

「お前さん達、燈臺見物かね。なら、燈臺の裏の方に廻つて見さつせい。そこには、胎内くゞりつて言ふのがあらア、東京の人は皆な誰でも行つて見るだ……。なアに、少し下りきへすりや好いだ。わけはねえ。」

聞きもしないのに、こんなことを教へて向ふに行つた。その向ふからは、漁師の囃が大きなざ

るをかついで歩いて来た。

二人はそのざるの中を覗いて見たりし、食へやすとも……。これ養て食ふと旨いだ。などとその囃は笑ひながら説明した。

爺の茶店では、上さんが頻りに暖簾などをかけてゐたが、二人が疲れたやうにして入つて行くと、赤い毛布を慌て、持つて来て、前に出してある縁臺の上に敷いた。好いお天氣で御座んすなア。などと上さんは愛憎を言つてから茶を運んで来た。

爺と一緒に伴れて行かうとするのを今朝は何うしても厭だと言つてきかなかつた女の兒は、其處に立つて、二人の茶を飲むのを見てゐた。茶色の犬は、もう一つの方の縁臺の下に寝てゐたが、のつそり起上つて、二人の傍に来て鼻を押附けた。

貝殻だの繪葉書だのが其處に一面に竝んでゐて、傍には煙草だのサイダーの壘だのが置かれてあつた。赤い毛糸の小さい網の中には種々な形をした小さな貝が澤山に入つてゐた。お土産に貝でもいかゞです。などと上さんは二人に勧めた。

「サイダーでも飲むかね？」

「澤山。」

女は頭を掉つて見せた。

此處でも、上さんは胎内くゝりの話を二人にしてきかせた。「昔は行つて見る人もなかつたんだけど……家の爺がな、名所にしちやつたんでがんすよ、今ちや燈臺に来て、そこから下りて見ねえ人はねえ位だ……。なアに、譯はねえだよ。見つて御覽なんし。」

やがて其處を出かけた二人は、燈臺の前に行つて、暫く立ち留つて、鐵索の上に翻つた天氣豫報の旗などを見てゐた。燈臺の上の硝子窓には、朝日がキラキラと映つて美しく五色に輝いてゐた。

二人は何も言はなかつた。しかし、海にある何物にか惹かれるやうに、二人はいつか燈臺の石堀について裏の方へと廻つて行つてゐた。草には朝露がしとどに置いて、拾ふやうにして歩いてゐる女の白足袋も青く汚れた。燈臺の裏には其處に住んでゐる人達の棄てた塵埃の山があつて、

其處には汚い溝などが流れ出してゐた。二人はそれを越えて行つた。

やがて燈臺を後にして立つた二人の前には、廣い海が一面に展げられた。それは穩かな朝で、日に照つた縮緬の皺のやうな波の上には、鰯舟が黒い胡麻つぶのやうになつて何艘となく見えてゐた。岸の黒い岩には波が押寄せて來ては碎けた。

胎内くゝりは、そこからまた二三町下に下りたところにあつた。丁度、岩の一部が波の爲めに削られて出來たやうな洞窟で、前には深い碧い海が、鰯が何ぞの口のやうに物凄く開けてゐた。二人は其處まで下りて行つて見た。

もう一度燈臺のところまで戻つて來た女は、男の肩に凭らなければ歩けないほど疲れてゐた。顔の色は蒼白く、唇は土色になつて震へてゐた。岩の蔭で長い間休んでゐた時には、女の頬に涙が流れてゐた。

「早く行かうぢやないか。」

「え……。」

女は容易に立上らうともしなかつた。女はハンケチで顔を押へてゐた。

「早く行かう。」

男はまた促した。

男の顔も蒼白かつた。二人は燈臺裏の處まで上つて来て、其處でまた長い間休んでゐた。燈臺に住んで居る人達は、岩に腰をかけていつまでも海の方を見てゐる二人を見た。

四

「馬鹿女。」

「何方が馬鹿女だ……てめいの尻早は誰でも知つてるぢやねえか……頭の上の蠅を逐へ。」

「何とでも言ひやがれ。」

「言はなくて何うする。手前は人の飯を貰つて食ひやがつた。乞食女の。」

「大いお世話だ。」

男だか女だか解らないやうな聲が小屋の中から聞えた。喧嘩かと思へば、さうでもないやうであつた。續いて笑ふ聲がした。闇の中にそこだけ明るく見えてゐる障子には、男と女の影が映つた。背の高い男はやがて其處から出て來たが、小便をすると、そのまゝ内に入つて行つた。燈臺に行く路は、全く闇に包まれてゐた。その明るい小屋の障子の他には、灯の影は何處にも見えなかつた。爺の茶店は、日が暮れると戸を閉めて早くから寝た。爺は女の兒を抱いて寝てゐた。

波の音は凄じくこの半島の絶角の周圍を取巻いてゐた。風もいくらかはあつた。かういふ暗い夜に、沖を行く汽船はあるだらうか。一分毎に廻轉する燈臺の光を遙かに認めて、危く岸に寄らうとした針路を大洋に向けて走つて行く汽船はあるであらうか。燈臺の光は、丁度人間に臨んだ神の大きな力でもあるかのやうに——またはおそろしい怪物が闇の夜を己が世界と振舞つて暴れて光つてゐるやうに、太い幅広い光線ををりく、あたりに漲らせて行つた。高原の上の停車場には、丁度今最終の列車が到着してゐた。

燈臺へ行く道

五

燈臺へ行く路は、その朝いつもに似合はない活動を見せてゐた。人達は大勢海岸の方から急いで走つて来た。

「何だ、何事だ。」

今朝漁に出やうとした漁師はかう言つて訊いた。

「又やつつけたとよ。」

「また、やつつけた。男か女か？」

「男だとよ。」

「野郎か、よく命の惜しくねえ奴があるなア。」

「助からねえか。」

「何うだかまだ知れねえ。」

人達は走つて行つた。

「何處のお客だ。」

「何でも下の客だつてよ。」

「水明樓のか。」

「さういふ話だ。」

茶店の前から燈臺の門の方へと人達は驅けて行つた。その旅籠屋の番頭もその中に雜つてゐた。茶店の前にちよつと立寄つた男は、「さうか爺さん行つたか。うむ……さうか……矢張爺さんが見附けたのか、……さうか……まだ體が暖かい？」かう言つたが、「情死だつて言ふぢやねえか。」

「さうだんべつて言ふんだが。昨日来て此處にやすんだ衆だんべつて思ふんだが、男の死體きりまだ上んねさうだよ。昨夜、遅くなア、水明樓で心配して来たで、命助けてやんべいと思つて彼方此方がしたんだが、夜ぢや見當がつかねえでな……今朝やつと見附けたんだ。」

燈臺へ行く道

「胎内くゞりか。」

「さうだつて言ふこつた。」

男は走つて行つた。

昨夜十二時過ぎから、爺は殆ど眠らなかつた。水明樓の番頭と二人で彼方此方と隈なくさがした。しかし何處にもその姿は見えなかつた。「殊に由ると、急に思ひ立つて、銚子の町へでも出かけて行つたのかも知れない。しかしそれにしちや何とかことわつて行きさうなもんだ。」二人はこんなことを言つて、燈臺の路を歩いた。「兎に角明日になんねえけりやわかんねえ。」で、夜の二時頃に水明樓の番頭は歸つて行つた。爺も家に歸つて寝たが、何うしても氣になつて眠られない。人の命を助けてやることは唯一の得意とも誇りともしてゐる爺は、今、死にかけてゐるやしないかと思ふとじつとして居られない。夜が明けると、隣の茶屋の息子を呼び起して、急いで燈臺の後から胎内くゞりの方へ行つた。岩の方からぐるりと廻つて、念の爲めに、その向ふをのぞいて見た爺は、「ゐた、ゐた、其處にゐた。」と叫んだ。男は俯伏になつて波に漂はされてゐた。着物は

半分まくれて、股が白く見えてゐた。

急いで岩角に取ついで、帯をつかんで引上げやうとしたが、容易に上らない。「おい、俺が入るから、貴様こそ帯を持つてろ。」かう隣の息子に聲をかけて、爺は漸くそれを岩と岩との間の砂地に引揚げた。「まだ、温けいな、三四時間位しかた、ねえな。」爺はかう言つたが、其處等にもう一つ相手の死體が漂つてゐるやしないかと思つて、其處此處と四邊を胸した。しかし何處にもそれらしいものは見當らなかつた。

遠くの岩の方へ傳つて行つた息子に爺は聲をかけた。

「ゐねえか？」

「ゐねえ。」

爺は馴れてゐるので、其間にも、一生懸命に死體に人工呼吸を施してゐた。體がまだいくらかは温かであつた。彼方此方を探し廻つた隣の息子は、やがて手を空うして其處に歸つて來たが、「ゐねえか、さうか。」一緒に死んだに違けえねえと思ふがな……。女はおつかなくなつて逃げ

たかな。爺はかう言つて「まア、仕方がねえ、貴様、薬を持つて来、助かるかもしれないで、隣の息子は一散に駆け上げて、それを茶店から水明樓の方へと知らせた。

噂は口から口へと傳つて行つた。

「一緒に死んだんなら、流されて沖へ出るわけはねえ……。女は逃げたか知れねえよ。こんなことを其處に集つた人達は噂してゐた。岩陰では爺は薬火を焚いてゐた。

それから数くとも一時間位は経つた。「これは駄目だ、とて、助からねえ。爺は残念さうに言つてゐた。駐在所からは早速巡査がやつて来て、劍を手で押へながら、燈臺の裏の路を胎内くゞりの方へと下りて行つた。

丁度その時分、茶店のすぐ向ふになつてゐる崖を傳つて、朝早くから岩かけに貝を拾つて行つてゐた漁師の噂は、蒼青になつて慌て、飛んで来た。

「そこに女が死んでゐる。」

「え、女が……。何處に？」

茶店の上さんは訊いた。

「其處に、……。其下んどこに……。俺は吃驚したにも何にも……。ちつとも知らねえから岩につかまつて貝をさがしてゐると、そこに白い者が見えるでねえか。吃驚したにも何にも……。俺ら飛上る位だつた。」

「ぢや、矢張、死んだんだ。情死だア。」

「また他にもあなかね。」

「男が燈臺の下で。」

「まア、厭なこつた。」

一方では燈臺の方へ知らせに行くと共に、一方では人がまた大勢崖の下の方へと下りて行つた。若者のあとからは犬がついて行つた。

さういふ報告を受けて、爺が巡査と一緒に其處へ下りて行つた時には、もう大勢人が集つて行つてゐた。岩と岩との陰に、女の死體が漂つて、黒い髪が藻か何そのやうに亂れてゐた。白い脛

が半分見えてゐた。

爺ともう一人の漁師が裸になつて水の中に入つて行つた。巡査は集る群集を制止した。「まだ、若い、綺麗な女だ。」こんなことを言ふ女達もあつた。

死屍を引揚げて見えないやうに、菰をかいたが、爺はもう人工呼吸をかけやうともしなかつた。爺は疲れてゐた。「何も、若い身でなア、死なねえでも好かんべいにな。」など、言つた。

爺の觀察に由ると、一緒に死んだものが潮の加減で此處まで流されて来たとは何うしても思はれなかつた。「男が先に死んだんだんべ。女はおつかなくなつて此處まで逃けて来たんだんべ。そして男が死んだのを考へて、此處から飛び込んだんべ。」かう爺は言つた。「おら、いやだ、いやだ、人助けも好いが、かういふ若い者達の死屍の片附は、おらア、もう厭だ。」爺はこんなことを言つて、岩陰にぬいで置いた着物を着た。

兎に角、駐在所まで死屍を引揚げなければならなかつた。其處から擔架を持つて来る間、巡査は爺の茶店の處に腰をかけて、其方へ下りて行かうとする群集を制止してゐた。もうかれ是九時

近くなつてゐた。燈臺の方に見物に来る遊覧客などもあつた。中には青年男女なども交つてゐた。

「え、情死？」

「女は何ういふ人？ 藝者？」

などと言つて通つた。

まだ其處に死屍が置いてあるといふので、ある人達は崖から下を覗いて行つたりした。チツクザツクした岩石の間には路がついてゐて、其處に集つてゐる人達が其處から小さくなつて見えてゐた。「よく、こんなところを、夜、女の身で下りて行つたもんだね。」

「死ぬ氣なら、何んな處でも行けるよ。」

「あ、そら、見えるだらう、かけてある菰が……。そら、あの漁師の傍るところに。」中にはこんなことを言ふものもあつた。

石切場の小屋のあはずれ女達は、  
「おらも情死でもするかな。」

燈臺へ行く道



「誰とするだ。相手があんめい。」

「いくらもそこらに轉つてゐるア。」

「石がか——。」

こんなことを言つて笑ひながら石切場の方へと下りて行つた。

擔架はやがて死屍を運んで来た。燈臺の方の死屍が先づ其處に來た。上には菰がすつかりかけてあつて、手も足も顔も見えないやうになつてゐた。人足は一刻も早くかういふやうな任務を果して了ひたいやうに、ぐんぐん燈臺の路を坂の下の方へと下りて行つた。女の方の死屍は、男の死屍が丁度石切場の外れあたりに行つた時分、折れ曲つた崖の路を此方へ出て來て、茶店の前に來て、ちよつと休んだが、其處に出てゐた上さん達は、「まア、可哀相に……。死ぬほど思つた仲なら、何んなことをしたつて一緒になればなれないことはなかんべにな。など、言つてその後を見送つた。菰の間からは、黒い髪が少しばかり見えてゐた。

一二時間の間に、種々な噂がさまざまな人の口の上つてゐたが、それもやがては收つて、燈臺

への路には、今まで何のこともなかつたやうに靜かに秋の日影がさしてゐた。石切場の石を鑿る音がトンカントンカン聞えてゐた。

波は依然として半島の周圍を取巻いてゐた。

## 六

二人の泊つてゐた旅館のすぐ近くに小さな村の駐在所があつた。そこは入口が廣い土間になつてゐて、その奥の板敷に、安物の卓が一つ置いてあつて、椅子が二脚並んでゐた。巡查が二人其處にゐた。

死屍は擔架で運んで來たま、その廣い土間の一隅に置いてあつた。矢張菰で蔽つたまゝになつてゐた。男は右に、女は左に並んで置かれてあつた。

旅館では今朝そのことが知れると、すぐ男の宿所にあて、電報を打つた。噂はそれからそれへとひろがつて、二里ほど離れてゐる町の新聞記者などもやつて來た。東京の藝者だといふことが

かなり世間の好奇心を惹いたらしかつた。東京の男の宅から返事の電報が来たのは、死屍を駐在所に持つて来て三十分ほど経つてからで、そのため成規の手續はせずに、そのまゝ、引取人の來るのを待つことにした。

駐在所には旅籠屋の番頭だの茶屋の爺だの検視の人達などが出たり入つたりしてゐた。裏の窓の硝子戸には、午後の日影が明るくさして透つてゐた。

東京を十時半に發した汽車は、午後の三時近くになつて漸くこの半島の高原の停車場に着いた。そこには、男の妻とその妻の伯父と娘とが乗込んで來てゐた。細君は今年の春生れた乳香兒を抱へてゐた。伯父は茶色の中折をかぶつて紋附の羽織の上に細かい縞のインバネスをあはつてゐた。來る時、乳香兒は是非置いて行きたいと細君は言つた。伯父もそれを勧めた。しかし、乳なしで世話をして呉れるやうな親類の女は周圍になかつた。仕方がなしに、伯父の娘が一緒に來ることとなつた。

男が家出してから、男の勤めてゐた銀行でのつかひ込み事件がすつかり家の人々にも知れて來

てゐた。七八千の金を男は三年の間につかひ果した。男の金つかひの荒いのを細君は前から薄々知つてゐて、その爲め何の位心配したか知れなかつた。細君はその藝者にも逢つてゐた。

藝者も男と時を同うして姿を躲したといふことがやがて知れたので、細君の心配は一通りでなかつた。飯も碌々咽喉に通らないといふほどの不安の中に一日は一日と経つて行つた。人を頼んで心當りを彼方此方とさがして貰つたが、行方はつひにわからなかつた。細君は乳香兒をかへて、朝から涙に袖を濡した。

つかひ込み事件の方も大變だが、それよりも何よりも夫の體の安全なのを祈つてゐた甲斐もなく、今朝電報を受取つた時には、細君の手はふるふる顫へた。細君は慌て、伯父の家へ飛込んで行つた。コシジンヘンシスグコイ——、電報にはそれだけしか書いてなかつた。女も一緒にやなかつたのでせうか。かう言つて涙を拭きながら細君は訊いた。

汽車の中は殆ど夢中でやつて來たと言つて好かつた。停車場を出ると、娘は代つて乳香兒を抱いた。旅館の番頭は、其處に迎へに出てゐた。お召の袷に黒紋附の羽織を着た背の高い容色の好

い二十五六の細君を番頭は見た。髪は束髪に巻いてあつた。

伯父は番頭と並んで女達よりも先に立つて歩いた。フムフムなど、言つてゐた。伯父の顔には興奮した眞面目な色が上つてゐた。松原に入るところで、伯父は細君に話した。「矢張さうですか。」かう言つた細君は下唇を堅く噛みしめた。顔の筋肉が顫へたと思ふと、涙は頬を傳つて落ちた。

一行は先づ旅館へへ行つた。昨日まで二人のゐた室には、信玄袋と風呂敷包と女の蝙蝠傘とが置いてあつた。細君はちよつと入つて見たが、堪らなくなつたと言ふやうに顔をハンチで押へて、すぐ其處から出て来た。海に面した室に三人は黙つて坐つた。若い娘の眼も赤くなつてゐた。「見つともないから、落附いてゐてお呉れよ。」

伯父は頼むやうに繰返して言つた。

旅館の主人が来たり番頭が来たりした。茶を運んで来た女中は、氣の毒さうに細君の方をぬすむやうにして見た。それは先の日三味線を持つて来た女中であつた。伯父は番頭の話しかける

今朝の悲劇を、

「まア、それはあどで聞く。」と言つて幾度となく制した。伯父は細君の興奮するのを恐れた。「お前、疲れたらうから、少し休んだら、何うだ？ 別の室で。」などと云つた。

一緒に行くといふのを、「まア、己が見て来る。」かう言つて出かけて行つた伯父は、二十分ほどして歸つて来た。

「あ、あ。」

溜息をついて、「世の中には、悲しい辛いことがあるものだなア、お清。」かう言つて伯父は慨嘆した。

「何うしてあるんです？」

「そのまゝになつてる。」

「私も行つて見なくツちや——」

留めても言ふことを訊かないし、天の死状を妻に知らせずに見せずに置くわけに行かないので、

暫くしてから、伯父は細君を伴れて出かけた。駐在所の前には、近所の人達が、大勢集つて何か頻りに言つてゐた。筒袖を着た漁師の唄などもあつた。二人が入つて行くと、急に押黙つて指し合つて何かコソコソ話した。菰がかげられたまゝ、土間に二つ並べて置かれてある死骸を前にした時には、細君の頭には暴風雨のやうにいろ／＼なことが通つて行つた。細君は蒼白い顔を四邊に見せて黙つて其處に立つてゐた。

巡査は二人とも其處に出て来てゐたが、一言二言言葉を交した後、その惨しい光景を見るに堪へないと言ふやうに、そのまゝ外に出て、其處に押寄せて入つて来やうとする大勢の人達を制してゐた。

丁度、其處に茶店の爺が入つて来た。巡査の一人は、「この爺さんが一番先に探して呉れたんです。」と二人に説明した。

「いろ／＼世話になりました。」

伯父はかう言つて挨拶した。

「何うかして助けて上げていと思つて、いろ／＼やつて見たんでがんすよ。私が引上げた時には男衆の方はまだ體がいくらか温かだつたから、言ひかけて、ちよつと間を置いて、薬火も焚いてあつたためて上げ申したけどもな……。残念なことでした。」

「ぢや、一緒ぢやないんですか、別々ですか。」

「え、別々です。男衆の死骸のあつたところと女の死骸のあつたところは、丸で別でしたからなア……。何うしても、潮の加減ぢやあんめいと私は思ふだ。」

爺と伯父とこんな話をしてゐる間に、細君は二歩三歩進めたと思ふと、そのまゝ死骸の傍に行つて、菰をまくつて夫の死顔を見た。急に堪らなくなつたといふやうに、其處に蹲踞んで兩手に顔を押當てた。束髪に結つた髪の後櫛のところが微かに戦へた。

細君は續いて其處に並べて置いてあつた女の菰をまくつて、その死顔をじつと見た。女は白い蠟のやうな顔をして、微かに眼を明いてゐた。髪は房々と亂れて白い肌にかゝつてゐた。小さな